

委員会活動  
報告書

学術講演会・国際シンポジウム将来構想検討委員会

2020年3月31日

## 目次

1. はじめに .....	1
2. 委員会活動 .....	1
2.1. 目的と活動内容 .....	1
2.2. 活動期間 .....	1
2.3. 委員会開催日時 .....	1
2.4. 委員会名簿 .....	2
3. 学術講演会の開催方法についてのアンケート調査結果 .....	3
3.1. アンケート実施方法 .....	3
3.2. アンケート項目 .....	3
3.3. アンケート結果 .....	4
4. 学術講演会に関する提案・提言 .....	5
5. 今後の学会活動に関する提案・提言 .....	6
5.1. 学会活性化につながる企画の立案 .....	6
5.2. 学会活動の会員数増加、知名度 up に向けた活動について .....	7
5.3. その他学会活動に関する提案 .....	8
巻末資料 .....	9
第 1 回 学術講演会・国際シンポジウム将来構想検討委員会 議事録 .....	10
第 2 回 学術講演会・国際シンポジウム将来構想検討委員会 議事録 .....	17
第 3 回学術講演会・国際シンポジウム将来構想検討委員会 議事録 .....	24
第 4 回学術講演会・国際シンポジウム将来構想検討委員会 議事録 .....	27
学術講演会に関するアンケート結果 .....	31

## 1. はじめに

物理探査学会では、会員の高齢化と会員数の伸び悩みから学会の将来には不安がある。特に学術講演会および国際シンポジウムにおいては、発表件数、参加者の減少が顕著である。現状、学術講演会は年に2回、国際シンポジウムは2～3年に1回のペースで実施されているが、将来にわたって継続的に現在のようなペースでの開催が可能か懸念されている。このような状況のもと、学術講演会および国際シンポジウムのあり方について検討するため、企画開発委員会の小委員会として本検討委員会が発足した。

## 2. 委員会活動

### 2.1. 目的と活動内容

- ・ 将来の学術講演会・国際シンポジウムのあり方について検討を行い、改革案の報告を行うこと
- ・ 学術講演会を利用した公開検討会の開催や会員アンケート調査を行うこと

### 2.2. 活動期間

本委員会の活動期間は2019年1月～2020年3月末である。

### 2.3. 委員会開催日時

以下に示す日程で計4回の委員会を開催した。

- 第1回 委員会  
日 時：2019年1月16日（水） 14:00～17:00  
場 所：物理探査学会 会議室  
参加者：13名
- 第2回 委員会  
日 時：2019年3月15日（金）14:00～17:00  
場 所：物理探査学会 会議室  
参加者：11名
- 第3回 委員会  
日 時：2019年5月17日（金）14:00～17:00  
場 所：物理探査学会 会議室  
参加者：9名
- 第4回 委員会  
日 時：2019年8月27日（火）14:00～17:00  
場 所：物理探査学会 会議室  
参加者：8名

## 2.4. 委員会名簿

本委員会の委員および委員会への参加者を以下に示す。

役割	氏名	所属機関	所属委員会
委員長	小西千里	応用地質株式会社	国際
委員	尾西恭亮	(国研) 土木研究所	会誌編集
	上田匠	早稲田大学	会誌編集, 国際、学術講演
	伊東俊一郎	サンコーコンサルタント株式会社	学術講演
	野上俊介	住友資源開発株式会社	学術講演
	白石和也	(国研) 海洋研究開発機構	国際
	村田和則	サンコーコンサルタント株式会社	企画開発
	越智公昭	地球科学総合研究所	事業
	草茅太郎	川崎地質株式会社	企画開発
	鈴木憲一	国際石油開発帝石株式会社	
オブザーバー	程塚保行	株式会社地球科学技術研究所 (当時)	学術講演
	小森省吾	(国研) 産業技術総合研究所	会誌編集
会長	大熊茂雄	(国研) 産業技術総合研究所	
副会長	三木 茂	基礎地盤コンサルタント株式会社	企画開発
常務理事	相澤隆生	サンコーコンサルタント株式会社	
理事	鈴木浩一	電力中央研究所 (当時)	学術講演, ニュース, 企画開発, 事業
	岸本宗丸	日鉄鉱コンサルタント株式会社	学術講演
	大澤 理	国際石油開発帝石株式会社	国際
	鈴木敬一	川崎地質株式会社	総務財政, 事業

### 3. 学術講演会の開催方法についてのアンケート調査結果

#### 3.1. アンケート実施方法

- ・ 会員からの意見を速やかに集約するため、Web サービスを利用した
- ・ 回答期間：2019年6月1日～2019年7月5日
- ・ 得られた回答数：330人（正会員の約3割に相当）
- ・ 利用した Web サービス：Questant (<https://questant.jp/>) で3か月間有効なアカウントを作成した。費用は1万円であった。
- ・ 学会事務局から会員への一斉メールで、上記 Web サービスへのリンクを送付した
- ・ メールが使えない会員のために、学会の Web サイトにアンケートページへのリンクを貼った

#### 3.2. アンケート項目

会員アンケートでは以下に示す①～⑫の設問を設けた。

① 年齢

20代 30代 40代 50代 60代 70代以上

② 職業

民間企業（資源・エネルギー系） 民間企業（土木・建設系） 大学 研究機関  
行政・公的機関 その他（選択した場合、条件分岐で自由記述欄を表示させる） 所属なし

③ 勤務地はどこですか？

北海道 東北 関東 中部 近畿 中国 四国 九州

④ 現状の学術講演会の開催（年2回）についてどう思いますか？

多い 少ない 適当 わからない

⑤ 学術講演会の回数は1年に何回がよいですか？

1回 2回 3回以上

⑥ 学術講演会の開催時期は、いつを希望しますか？（複数回答可）

1-3月 4-6月 7-9月 10-12月

⑦ 学術講演会に参加する主な目的は何ですか？（複数回答可）

自身の発表 講演聴講 展示会参加 運営側として 特別イベントへの参加 会員との交流・人脈形成

⑧ 学術講演会への参加頻度はどのくらいですか？

ほぼ毎回 年に1回 ときどき ほとんど参加しない

⑨ 他学会も含め1年間に何回程度、学会（講演会・シンポジウム）に参加されていますか？

1-2回 3-4回 5-6回 7-8回 9-10回 11回以上

⑩ 今後の学術講演会に期待すること（複数回答可）

講演数の増加  
新しいセッションの設置（ディスカッション、若手のみ、質問対応、公募型 etc.）

□企業展示の充実

□特別イベントの充実（ショートコースや研究会，市民講座など）

□交流会の充実

⑪ 今後特に聴講したい分野はどれですか？

□土木・建設 □地震・防災 □資源探査 □地熱 □環境・農業 □データサイエンス □計測機器開発 □その他

⑫ 物理探査学会の今後の活動に対する希望（自由記入）

### 3.3. アンケート結果

以下にアンケート結果の主なポイントを挙げる。全ての結果については、巻末にまとめて示す。

- ・ 回答者の半数が 50 代以上と、高齢化が明確（あくまで回答者の年代分布であるが、実際の年代分布でも同様である）。
- ・ 全体としては現状維持（年 2 回の学術講演会）が適当とする意見が多い（図 3-1）
- ・ 30 代，40 代では年 2 回の学術講演会が多いと感じている割合が増える（30 代では半数以上が 1 回を希望）（図 3-2）
- ・ 「講演聴講」以外に「会員との交流・人脈形成」を参加目的としている（図 3-3）
- ・ 「講演数の増加」、「新しいセッションの設置」、「特別イベントの充実」への期待が大きい
- ・ 自由意見欄に多くの指摘あり（自主的な勉強会の主催，辛辣な意見，学会スリム化，参加費の低減，国際シンポジウムに関する意見など）

#### Q4.

現状の学術講演会の開催数(年2回)についてどう思いますか？

(回答数: 330)

ここにコメントが入力できます。

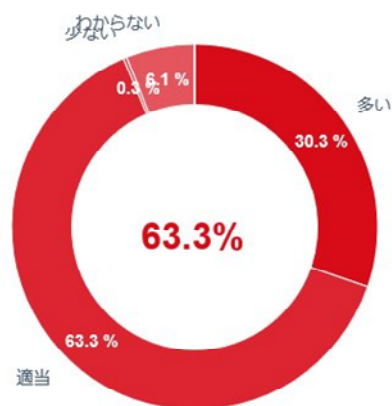


図 3-1 現状の学術講演会の回数に対する回答

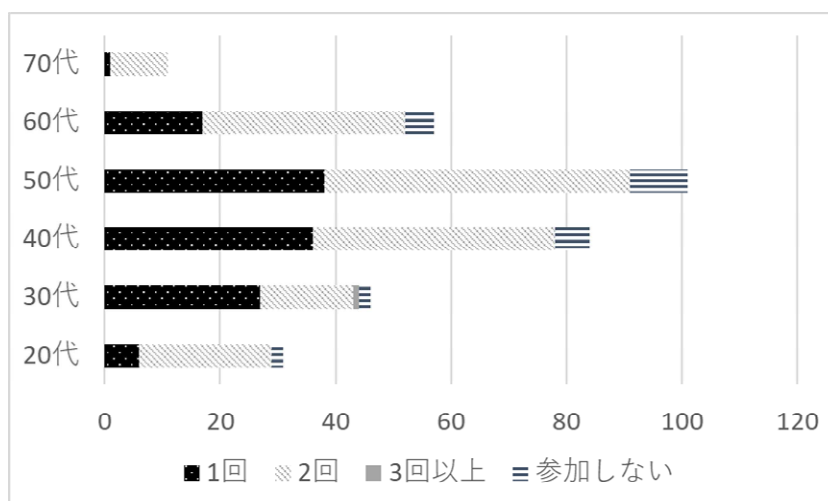


図 3-2 学術講演会の希望回数に対する回答

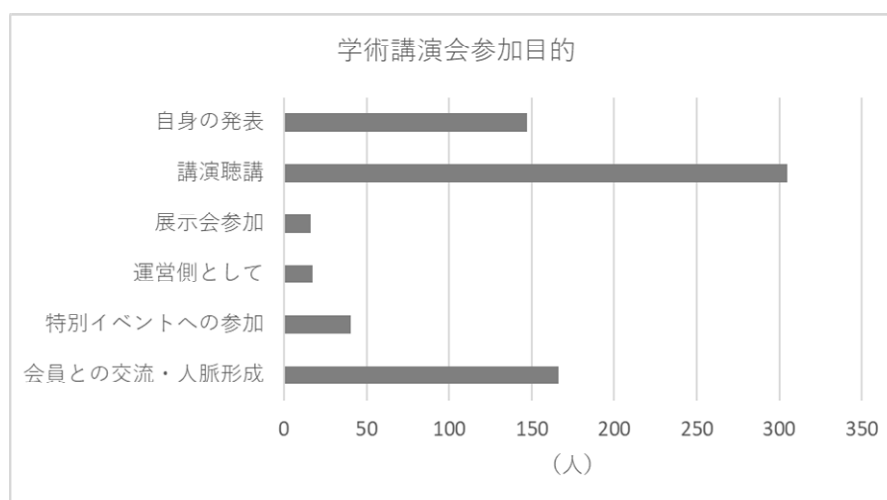


図 3-3 学術講演会参加目的に関する回答（複数回答可）

#### 4. 学術講演会に関する提案・提言

会員アンケートの結果をもとに委員会で議論した結果、以下のような提案を行った。

- 春の学術講演会は廃止し、一般の講演（発表）は行わない
- 春は2日間の行事を実施する（1日は総会と記念講演、もう1日はその他イベント）
- 秋は通常通り開催、場所は東京と地方で隔年開催とする

##### （背景説明）

- ・ 会員アンケート結果では現状維持を希望する意見が多いが、今後の学会を担う30代、40代では1回でよいという意見も多い。
- ・ 多くの方が「講演聴講」を参加目的としているが、これまで通りの一般講演が増えることを望

んでいるとは思えず、むしろ新セッションの設置や特別イベントなど、内容の充実に期待していると考えられる。

- ・ 参加目的として「会員との交流・人脈形成」を挙げる方も多く、学術講演会でなくとも会員が集まる機会を減らさなければよいともいえる。

上記案の実施にあたって、常設の委員会での検討事項として、以下の5点を挙げた。

- ① 講演会参加費、企業展示費用の収入がなくなることによる学会収益への影響
- ② 実施するイベントによって主幹する委員会が毎年変わる可能性がある。担当する委員会を決める、あるいは委員会の役割を再編する必要がある
- ③ 新イベント（例えば新しい研究会）を企画するのであれば、担当する委員会、学会の定款の見直しなどを考える必要がある
- ④ 春の学術講演会を廃止することで、これまで学術講演委員会が行っていた総会会場手配などの担当を考える必要がある
- ⑤ 秋の学術講演会のスケジュール（仮に発表数が激増した場合を見据えて）

## 5. 今後の学会活動に関する提案・提言

### 5.1. 学会活性化につながる企画の立案

委員会で議論した際に挙げた意見を以下に列挙する。

#### ✓ 学術講演会に関して

- 新しいセッションの設立
  - ・ ディスカッションセッション
  - ・ 若手セッション
  - ・ Q/A セッション
  - ・ 企業展示紹介セッション
  - ・ 他学会との共催セッション
- ランチセミナー
- 講習会の開催
- 市民講座の開催
- 講演予稿集冊子の廃止（電子化）

#### ✓ 賛助会員向けのイベント

- 企業の合同学生向けセミナーの主催
- インターンシップの窓口などの活動



- ✓ 市民講座の充実
  - 2015年の国際シンポジウムで実施した「地球のお医者さん」
  - 出前授業
  
- ✓ 大学の講義への協力
  - キャンパスビジット（実施済）
  - 夏季集中講義への協力
  
- ✓ 高校生向け講座
  - 昨年の国際シンポジウムで実施済（継続したい）
  
- ✓ 学会から大学（高校）への研究資金の提供
  
- ✓ 他学会との協力
  - 応用地質学会（数年前から実施済）
  - 農村工学会（昨年、企画セッションあり）

他学会に物理探査学会から派遣する形にすれば、選ばれた人は参加しやすいかもしれない。学会が費用を負担できれば、なおよい。
  
- ✓ 研究小集会の開催増加
  - 参加費無料の会議（セミナー）
    - ・ 地盤探査研究会
    - ・ 電気探査研究会
    - ・ 地震防災研究会
    - ・ その他、有志の集まり
  
- ✓ SEG の DISC, HL, DL, EAGE の EET の活用
 

資源系の会社では、学術講演会よりもこちらの方にメリットを感じているような気がする。

## 5.2. 学会活動の会員数増加、知名度 up に向けた活動について

委員会において、学会の会員数増加、知名度 up に向けた活動について議論した内容を以下にまとめた。

- ・ 未だに物理探査の知名度は低いので、市民講座やキャンパスビジットといった活動は重要である。
- ・ JpGU での広報は、物理探査を学生に知ってもらうため、また会員企業の紹介の場としても有益であり、続けるべきである。
- ・ 海外で実施されている Geo クイズのような学生イベントに積極的に参加させる仕組みが必要ではないか

- ・ 現状、物理探査関係に積極的に進もうとする学生の数は少なく、興味もあまりないように見える。就職先としてはネームバリューと収入を重視する傾向が強く、石油関連業界（商社含む）に進みがちである。
- ・ 企業でのインターンシップ、現場体験などの経験があると、学生も興味を持ち始めるようなので、学会としてそういった機会を紹介するお手伝いができるとういのではないか。
- ・ 学会として、企業の合同学生向けセミナーの主催、インターンシップの窓口などの活動ができれば、学生と企業の双方にもメリットがある。賛助会員へのサービスとしても提案できるのではないか。

### 5.3. その他学会活動に関する提案

会員数が減少し、会員の高齢化が進む中で、物理探査学会が無理なく持続できるような改善が必要である。たとえば、現在の作業を省力化するための施策として以下のようなものが挙げられる。

- ① 各種委員会活動の集約による作業の効率化
- ② Web サービス、ビデオ会議等を用いた会議の開催
- ③ Web コンテンツ等の充実による会員サービスの向上

#### (補足)

- ① 常設委員会だけでなく、各種委員会も随時開催されており、関東圏の会員の中には複数の委員会を掛け持ちされている方もみられる。重複する作業や省略できる作業があれば、整理すべきである。
- ② 従来のように会議室に集まったの委員会だけでなく、積極的にビデオ会議を行うことで、地方の方にも委員会活動に参加してもらえる。また、今回実施したような Web サービスを用いた会員アンケートを頻繁に実施し、会員の声を聞く機会を増やすべきである。Web サービスは安価であり、また容易にアンケート作成・集計も可能であり、大きな負担にはならない。
- ③ ホームページから閲覧できる技術情報（コンテンツ）をより充実させるべきとの声がある。SEG や EAGE が行っている動画配信のようなものがあるのもよい。

卷末資料

## 第1回 学術講演会・国際シンポジウム将来構想検討委員会 議事録

日 時：平成31年1月16日（水） 14:00～17:00

場 所：物理探査学会 会議室

出席者：大熊茂雄（会長）、三木茂（副会長、企画委員）、相澤隆生（常務理事）、鈴木浩一（理事、学術講演、ニュース、企画、事業委員）、岸本宗丸（理事、学術講演委員）、小森省吾（会誌編集委員）、野上俊介（学術講演委員）、程塚保行（学術講演）、村田和則（企画開発）、草茅太郎（企画開発）、越智公昭（事業委員）、白石和也（国際委員）、小西千里（国際委員）、

欠席者：大澤理（国際委員）、尾西恭亮（会誌編集委員）、上田匠（国際委員、会誌編集委員）、伊東俊一郎（学術講演委員）、鈴木憲一

### 【配布資料】

- ①学術講演会・国際シンポジウム将来構想検討会（仮称）について
- ②委員名簿
- ③物理探査学会の状況
- ④今後の学術講演会・開催方法（案）（2016. 3.31 の資料）
- ⑤KSEG からのメール

### 【内容】

1. 大熊会長より、本委員会設置の経緯と期待する役割について説明
2. 三木副会長より、物理探査学会の現状について、統計データの説明（資料②）
3. 鈴木理事より、2016年に学術講演会の検討を実施した際の経緯とその内容について説明（資料③）
4. その後はフリーディスカッション

### 【決定事項】

- ・ 春の学術講演会を無くすことに関し、会員アンケートを取って決める
- ・ 春の学術講演会を JpGU で代用することについて、そのメリット・デメリットをまとめ、本委員会からの提案としてまとめる
- ・ 提案書は4月の理事会までに作成する
- ・ 他の長期的な構想に関する提案は4月以降に順次まとめる
- ・ 次回の委員会は3/15（金）午後 を予定

以下に挙げた意見をテーマ毎に記す。

## 2016年の検討時のこと

- ・ 当時から会員数は減っており、年2回は多いのではないかとということで検討したが、当時は学会の決算が赤字になることは許されない状況であり、収益を確保するために年2回やることが必須と考えられていた。今とは状況が異なる。
- ・ 新設セッションを追加することになり、それは既にいくつも実施されている。参加者が増えたようにも感じるが、その効果はまだ明確ではない。
- ・ 春に総会を実施する必要がある。
- ・ 総会は時間がかかるので、日数を2日に減らすと発表件数は50件がギリギリである。

## 各機関・会社（個人）での物理探査学会の位置づけ、学会参加に関する意見

- ・ 土木・建設関係では、発注者が参加しない物探学会よりも、土木学会、地盤工学会の方に重きをおきがちで物探学会の優先度は高くない。
- ・ JAMSTECではJpGUに参加する人が圧倒的に多く、物探学会はあまり関心がない。
- ・ 最近の物探学会の発表は工学的なものが増えてきており、学術的な内容であれば、多学会（地震学会、地下水学会、電磁気学会、火山学会など）を選ぶ人が多い（AIST）。
- ・ 石油資源系のサービス会社は、発表許可を取ることが難しく、発表は難しい。クライアントの発表が少ない。あまり発表を念頭に置いてる人が多くない。動向調査等で参加することはあるが、JpGUと重なることもあり、どちらかの選択になる場合がある。
- ・ JpGUの方が内容は多岐にわたるため、参加者にメリットが多いように感じる。
- ・ 学術的な内容、純粋なサイエンスの発表をもっと増やせば、参加者も増えるのではないか。
- ・ 大学の教授が多くの学生を連れてくるという事も無くなった。
- ・ 大学の学生の発表の場としての価値が低くなってきたのでは？
- ・ 学会に付随して開催した研究会だけに参加するような人もいるので、そのような企画をもっとやってもよいのでは。
- ・ 講習会を同時にやってもよい。
- ・ 若手の研究者同士のコミュニティが少なくなってきており、特定のテーマに対してまとまった発表を集めるのが難しくなっている。大学の若手の先生が同じような研究をしている研究者を集めて研究会を開催するといった活動が少ない？
- ・ 他学会のようにプロポーザルセッションを設けてはどうだろうか？
- ・ 若手セッションを開催している学会もある。司会者、発表者、質問者全てが30代以下というような感じで進めると面白い。物探学会でも試してみてもどうか。
- ・ 他学会に参加すると、物探を手法として使っている発表は案外多い。しかし、発表者は物理探査学会での発表は敬遠しているようである。それは技術的な質問を受けると困るから、といった不安があるようだ。
- ・ 技術的・専門的な発表と適用事例のような発表を明確に区別して、物探が専門分野ではない方でも発表しやすいものにすればよいのでは。
- ・ 物探を使ってみたい、あるいは使っているがあまり自信がない、といった専門外の方の発表に対し

て、アドバイスをするようなセッションを作れないか？（事前に相当な準備が必要ではあるが、面白そうな企画なので、やってみてはどうかという意見があった）

- ・ 以前に応用地質学会と共催したように、他学会との交流を増やすべき。まずは他学会の方を招待して、発表してもらうのはどうか。
- ・ 春の学会は東京開催で参加し易い。秋は業務上参加出来ない事が多い。

#### 学術講演会を年に2回開催することについて、JpGUに関して

- ・ 去年は、JpGU、春・秋の学術講演会、国際シンポジウムと4つもあり多すぎた。
- ・ 国際シンポジウムがある年は秋の講演会は1日だけにしてはどうか。
- ・ 春の講演会はJpGUで代用すればよい。総会をJpGUでやっている学会もあるので、できないことはないはず。
- ・ JpGUには様々な分野から参加者が集まるので、JpGUで講演会を代用することで物探学会がより認知されるチャンスとなるだろう。
- ・ JpGU参加のメリットは、(発表者) JpGUと春の講演会で2度発表準備をする必要が無くなる、(学術講演委員) 準備の負担が減る、(参加者) 別途春の講演会を見に行く手間・時間が省ける等で、デメリットとしては物探学会の収入が減ることが挙げられる
- ・ 現状でも2,3の物探に関わるセッションが提案されているので、そちらに積極的に投稿してもらうことで春の講演会の代わりになる。
- ・ JpGUだと、2-4ページの学術講演会予稿集がなくなり、がっかりする人もいるのではないか？会社によっては現状の予稿集を重宝していると聞く。
- ・ 別に予稿集を書くことにして、参加者に配布することには問題はないと思われるが、所有権など、要確認。
- ・ JpGUでセッションを提案するのはどの委員会が担当するか、あるいは委員会は何もしなくてよいか、決めておく必要がある。現状はボランティアベースのコンビーナによってセッション提案・運営がなされているが、そのままでもいいのか？
- ・ 秋にこだわらず、夏に講演会を実施してもいいのでは？大学の施設は借りやすいはず。
- ・ 夏は他学会もあまりないので、参加しやすいかもしれない。
- ・ 国際シンポジウムのある年は秋の講演会はやめる。秋は東京、地方、国際シンポで、3年周期で回すのはどうか？
- ・ 国際シンポジウムのある年に秋の講演会が無くすと、英語を敬遠する人がいるので、秋に日本語で発表できる機会を設けた方がよいのでは？たとえば、日本語のワークショップを1日設定するなどで対応できそう。
- ・ できるだけ多くの会員の意見を聞く必要があるので、アンケートを実施すべき。
- ・ アンケートはGoogleのサービスや学会のシステムを使うことが可能。今年の春の学会で参加者にアンケート用紙を配付して記入してもらうことが有効だろう。
- ・ 春の講演会をやめてJpGUで代用するとしても、移行期間としては2年ほどみるべき。来年(2020年)からというわけにはいかないのではないか。

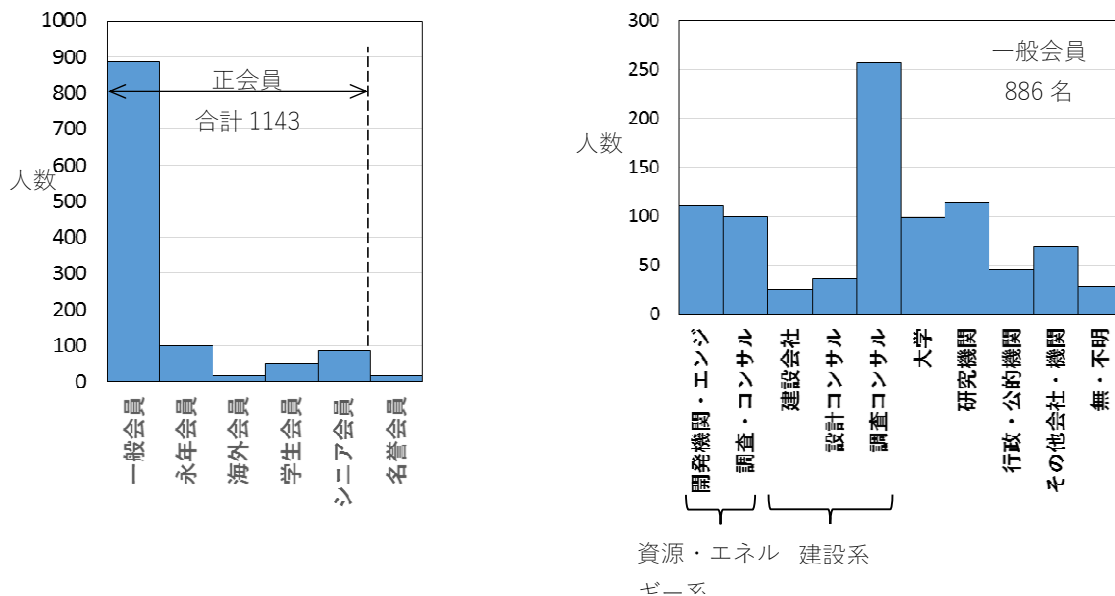
## KSEG との連携について

- ・ 優秀発表者をお互いの学会に派遣するのは賛成。ただし、発表者は現地の母国語ばかりのところに行かないといけないので不安だろうと想像する。
- ・ 海外の学会参加は、若手には非常によい機会なので、積極的に行うべき。人脈形成としても重要である。
- ・ 春に上記の発表者を受け入れるとすると、春の学術講演会の予定（無くすとどうなる？）にも関係してくる。
- ・ 国際シンポジウムの共同開催については、慎重に考えるべき。今年も韓国からの参加者はそれほど多くなかったはず。海外の学会のスタンスは毎年変わるので、あまり容易に受け入れるべきではない。
- ・ 韓国で国際シンポジウムを開催した場合、日本からの参加者が多くなるとは思えない。正直 30 名程度かと思われる。

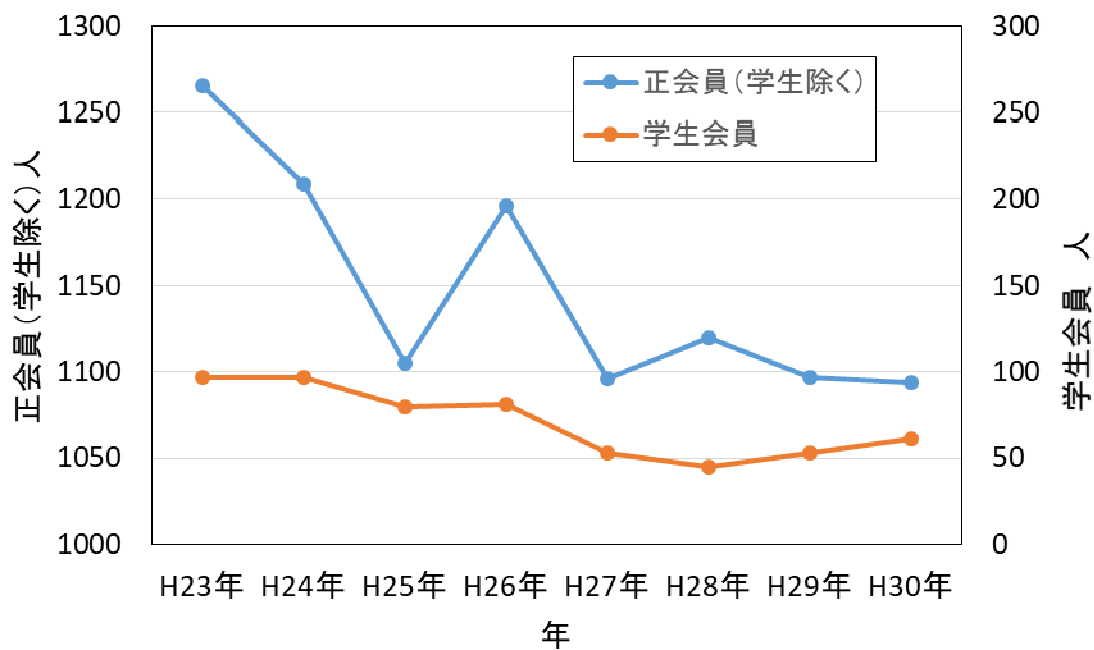
（議事録作成 応用地質(株) 小西 千里）

## 物理探査学会の状況

### 1. 会員区分と所属 (2018年11月)

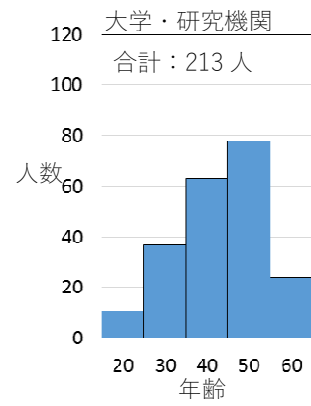
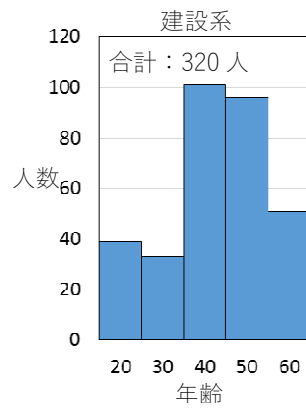
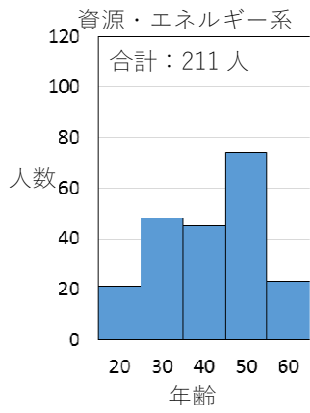
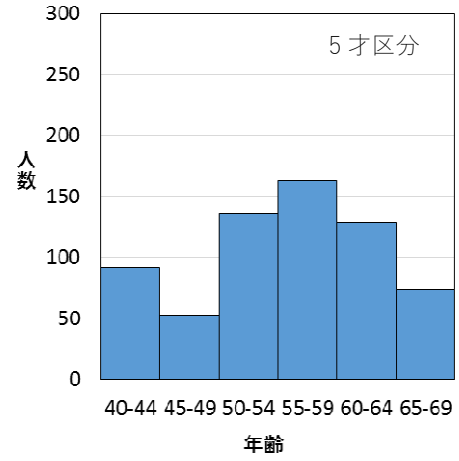
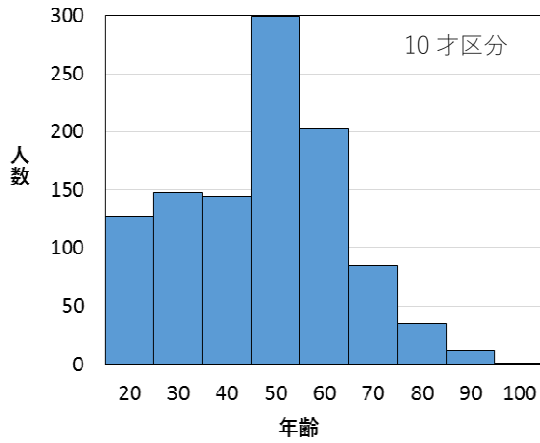


### 2. 会員数

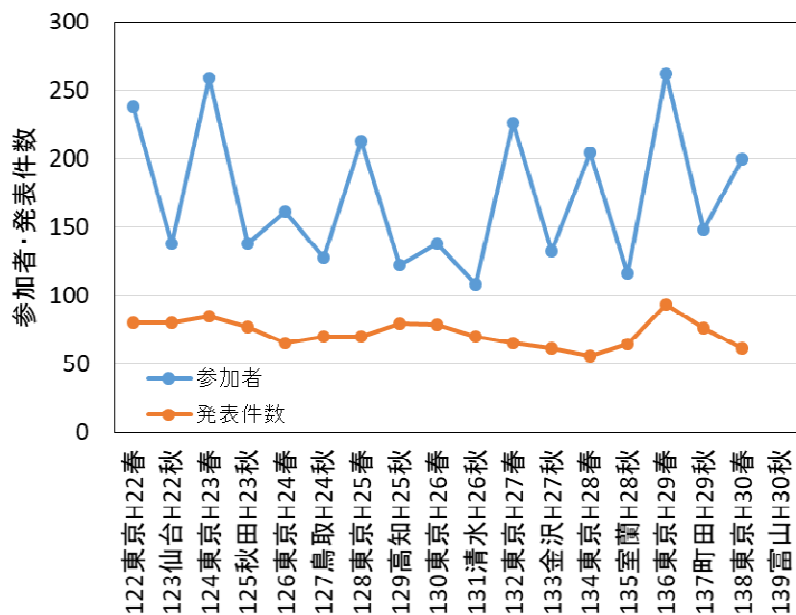




### 3. 会員の年齢構成 (2018年11月)



#### 4. 学術講演会参加者数・発表件数



#### 5. 国際シンポジウム参加者数・発表件数

回	開催地	開催年	全参加者	外国人	発表件数
9	札幌	2009	193	69	134
10	京都	2011	226	82	118
11	横浜	2013	208	62	142
12	東京	2015	109	35	69
13	東京	2018			

## 第2回 学術講演会・国際シンポジウム将来構想検討委員会 議事録

日時：2019年3月15日（金）14：00～17：00

場所：物理探査学会 会議室

出席委員：尾西委員，伊東委員，草茅委員，白石委員，鈴木委員，小西委員

欠席委員：上田委員，越智委員，野上委員，村田委員

その他参加者：大熊会長，大澤理事，鈴木（敬）理事，三木理事

### 【配布資料】

資料① 前回（第1回）議事録

資料② 春の学術講演会の廃止に伴うメリット・デメリットまとめ表

資料③ 会員アンケートについて

資料④ 会員アンケートについて（産総研小森さんから）

資料⑤ 学術講演会，国際シンポの魅力をもっとUPする案，参加者が増加する案について

資料⑥ 提案書たたき台

### 【内容】

1. 春の学術講演会を無くすことに関して
2. 国際シンポジウムの開催について
3. 学術講演会・国際シンポ・その他学会活動全般についての改善提案アイデア出し

### 【決定事項】

1. 会員アンケートの内容
2. Webサービスと紙媒体の併用によるアンケートの実施
3. 次回の理事会（4/19）でアンケート実施の承認を得た後に配信する
4. 次回の委員会予定 5月17日（金）14：00～17：00

以下、内容の詳細

1. 春の学術講演会を無くすことに関して挙げた意見
  - ・ まずは学術講演会がどういった目的で継続されてきたかを確認すべき。単なる技術交流のみならず、人的交流、地方開催では地域への技術普及などいろいろな目的があったはず。
  - ・ 上記の点を考えるために、資料②を作成し、対象ごとにメリット・デメリットをまとめた（しかし、JpGUへの移行ではなく、春の学術講演会の廃止によるメリット・デメリットにすべきであった）。
  - ・ JpGUとは「日本地球惑星科学連合」であり、基本的にはサイエンス系の学会であり、会員にとってJpGUに参加するメリットは、サイエンス系の方に偏るのではないか。

- ・ 建設系・土木系の会員は JpGU にはあまり参加しないのではないか。
- ・ JpGU への企業・学会の展示は学生のリクルート活動及びアピールの場として機能しており、実際に JpGU で物理探査学会の入会案内を手にして入会したという方もいる。
- ・ JpGU で物探学会の会員が発表することで、他学会の人や学生が物理探査学会への興味を増す機会にはなり得る。
- ・ JpGU はあくまで別の学会が開催し、物探学会は後援しているだけ。また物探関連のセッションを作っても、運営はあくまでもコンビナーが行い、必ずしも物探学会が主導できる、また会員が発表できるとは限らない。(注：投稿採否はコンビナー権限なため、コンビナーが物探学会と連携して対応すれば発表可能。) 同種のセッションの設立申請がされた場合に、JpGU から統合要請を受け、物探学会との連携が難しくなる可能性がある。既往の物探関連セッションには地震学会との関係が深いなど、将来的にも物探学会が主導的にできる見込みがない状況もある。
- ・ 1セッションで発表できるのは12編のみであり、約半数はポスター発表になってしまうので、現在の学術講演会からは発表形態の配分が大きく変わることになる。(注：投稿件数が予想より多い場合、コマ数が増加される場合がありますが、規定外の JpGU の運営判断による。)
- ・ 春の学術講演会がなくなって JpGU に発表するかどうかは、あくまで発表者個人の意向による。  
**JpGU が春の学術講演会の代替であるということではない。**
- ・ 会員アンケートでも、JpGU のことは特にふれない。年2回の学術講演会の開催についてのみ質問することにする。
- ・ 春の学術講演会を無くすのではなく、短縮するといった方向でもよいのではないか。
- ・ 期間を短縮して、テーマを絞って発表者を募る、従来通りいろいろな分野の発表を集める、総会と特別講演のみ実施する、といった案がある。
- ・ テーマを絞るというのは非常に難しい、特に継続が難しい。
- ・ 発表者にとっては、東京開催でも地方開催でもあまり変わりはないが、聴講者は東京でないと参加が難しい。
- ・ 秋が地方開催だけになると、参加が難しい人が増えそう。
- ・ 秋は地方のみとせず、東京開催と交互に実施すればよいのでは。
- ・ 原稿締め切りが年度末(3月)は厳しい。春に原稿を書いて秋に発表は楽である。
- ・ 学術講演委員会としては、秋の地方開催時の参加委員数の確保に苦労しているが、それよりも春と秋の2回開催による学会前後の準備・整理作業の方が負担となっている。よって春の期間を短縮しても一般講演が行われるのであれば負担はあまり変わらない。
- ・ 秋の開催のみとなり、発表数が増えても期間内に全て詰め込めるか?という意見もあったが、それは今はあまり考えなくてよい(うれしい状況であるので)。
- ・ 1件の発表時間20分は維持してほしい。
- ・ 資料③のアンケート案にある項目に加えて、○参加の形態(発表・聴講・展示) ○希望する時期(季節) ○他の学会も含めて学会参加の頻度(1年に何回か)を追加して配信することとした。
- ・ 学会からの一斉メールでWebサービスによるアンケートのリンクを送る。Googleフォームは、

セキュリティーの問題で会社内からのアクセスができない場合があるので、別のサービスを利用する

- ・ メールアドレスが無い場合、Web サービスにアクセスできないといった問題がある人には、ファイル添付等の方法も用意しておく。FAX の活用も検討する。
- ・ 必要によっては職場班の活用もあるが、集計作業が大変になるので、できるだけ Web サービスを利用したい。
- ・ アンケート実施の際には、背景説明（アンケート実施の理由）が必要である（会員の年齢分布など現状のデータも提示）。

## 2. 国際シンポジウムの開催について

- ・ 過去数回の経緯について、大澤理事より説明があり、まずは国際シンポジウムの開催意義について考えてほしいということであった。考えられる意義としては、日本の物理探査技術や研究の海外へのアピール、日本の企業や海外進出の足掛かり、日本人（特に若手）にとっての英語講演による場数を踏む機会、海外との技術交流・技術宣伝の場という位置づけなどが挙げられる。
- ・ The 13th SEGJ Int. Symposium では 200 名を超える参加者があり、その内の 4 割は海外からであった。来場者数が多かった中では、東南アジア（特にインドネシア）からの参加が寄与した。宣伝+近い場所での開催、というのが影響したのかもしれない。
- ・ 参加費 4 万円は海外の国際学会と比較すると高くはないが、国内開催とすると国内の会員にとっては高く感じる。料金の割に内容が充実していると言い切れるかどうか。特に展示会について、企業にとってはユーザーとなる参加者がきわめて少なく、またブースへの来訪も少なかったため、展示費用に対し効果がなかった、とのフィードバックがあった。
- ・ 国際シンポジウムとあわせてショートコースの実施も考えてはどうか。前々回の第 12 回シンポジウムにおいては、EAGE のコースを合わせて行ったが、行事委員会とも協議して、これ以外にも増やせるとよい。
- ・ 学術講演会と連続して実施する案もあり。ただし、それでは日数が多すぎる、発表者の奪い合いになるといった問題もある。
- ・ 学術講演会を秋のみにして、国際シンポジウムの開催を春にするという案もあり。あるいは秋の開催を東京と地方との交互にして、地方開催の年に東京で国際シンポジウムを開催する、という案もある。
- ・ KSEG より、国際シンポジウムを共催したいという連絡がきているが、現状ではどの程度の協力を期待されているのか不明であり、いきなりの共催は難しい。
- ・ 現状では、お互いが独自に開催する国際シンポジウムに参加者をなるべく多く派遣する、といった協力でよいのではないか。
- ・ KSEG が開催する国際シンポジウムの一つのセッションを SEGJ がオーガナイズする（たとえば、Near Surface セッション）といったところから始めるのが現実的。
- ・ KSEG は今後対外活動を積極的に行おうとしている雰囲気が見られる。SEGJ はどのようにして

いくべきか考えておく必要あり。

- ・ 日本の得意分野である Near Surface の技術展開を考えるなら、積極的に韓国で発表することもあるが、それはあまりメリットがない、むしろ東南アジアへの普及だろうという意見が多数であった。韓国は自国の技術で物理探査はできる、というスタンスと考えられる。
- ・ 優秀発表者をそれぞれ国内学術講演会に派遣するといった案は問題ない。誰を派遣するかは、別途検討が必要である。論文賞の奨励賞受賞者がよいのではないか。
- ・ 大澤理事が現時点での意向をまず先方に伝え、4月末に韓国に出張して、今後の協力関係について打合せを行う予定。

### 3. 学術講演会・国際シンポ・その他学会活動全般についての改善提案アイデア出し

- ・ 資料⑤に賛助会員に対する案（賛助のメリット）も追加してほしいという意見があった。
- ・ 過去に賛助会員向けのVIPセミナーが開催されたこともあるが、長続きしなかった。純粋な技術内容では参加者を集めることは難しい。事業展開の話が必要。国内外の物理探査の情勢（今のトレンドなど）を提供できれば有益かもしれない。
- ・ 講演会で賛助会員の冠セッションを作ってもよいのでは。
- ・ 研究小集会（地盤探査研究会等）は土木・建設分野に偏っている気がする。石油資源分野では石油技術協会の物探分科会が同様な機能を果たしている。
- ・ 研究小委員会やワークショップの技術テーマによっては、石油資源分野からも参加者は見込まれるはず。ドローン技術や人工衛星・リモートセンシングについては、石油資源分野も興味を持っている。

（議事録作成 応用地質 小西 千里）

第2回委員会 資料② 春の学術講演会の廃止（JpGU への移行）に伴うメリット・デメリット

	メリット	デメリット
物理探査学会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 他学会の方が聴講する機会となり学会の知名度 Up、会員数の増加に繋がり得る。</li> <li>・ 物探学会員であっても、多くの人に聴講してもらうために JpGU で発表したいと考える講演者を確保できる（研究・教育分野の会員の流出を防げる）</li> <li>・ ・総会も JpGU で行うことができる（要確認）。</li> <li>・ ・総会だけなら JpGU の参加費はかからない（要確認）。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 収入減（概ね 300 万の収入減、ただし、支出 250 万も無くなるので、収支は 50 万円減程度と想定）</li> <li>・ 存在意義の低下につながる可能性あり</li> <li>・ 総会の開催時期と場所を従来から変更する必要あり</li> </ul>
学術講演委員会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 会場を決める手間が無くなる</li> <li>・ プログラム編成・予稿集作成の手間が無くなる</li> <li>・ 会期中（3 日間）の拘束が無くなる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 秋の学術講演会の参加者確保がこれまで以上に必要となる</li> <li>・ これまでの 2 回分がまとめて秋に申し込まれ発表件数が多くなり過ぎた場合に採択作業が発生（うれしい悩みか）</li> </ul>
その他の委員会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学術講演会の代わりに特定分野の WS やシンポジウムの開催がしやすくなる</li> <li>・</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学術講演会と抱き合わせのイベントは実施できなくなる（学術講演会に代わる魅力的なイベントの立案が重要）</li> </ul>
講演者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学術講演会と JpGU の両方で発表していた人は、短期間で 2 つの発表を用意しなくて済む</li> <li>・ JpGU の参加者の方が多いので、多くの人に聴講してもらえる機会となる。</li> <li>・ 他分野の方にも聴講してもらえる機会となり得る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ JpGU の参加申し込みの締め切りは早い（2 月中旬）</li> <li>・ 年によっては、発表したいセッションが無い場合も考えられる</li> <li>・ 秋の地方開催は出張となるため、費用の問題あり（学生も）</li> </ul>
聴講者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ JpGU・物探学会どちらの発表も聞きたい人にとっては、参加の手間・時間・費用を減らせて参加しやすい。</li> <li>・ 他分野も聴講できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 比較的参加しやすい東京での開催が減る</li> <li>・ 幕張は早稲田より遠出となる人あり</li> <li>・ 業務の都合上、秋は参加しにくいことがある。</li> </ul>

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ JpGU に参加できない場合、物探学会の発表を聞く機会が減る。</li> <li>・ 冊子の講演予稿集が無くなる (JpGU の数行の Abstract のみでは、資料として活用しにくい)</li> <li>・ 参加費用が高くなる (1日券¥14,040, 全日券¥22,680)</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 講演者も聴講者も関東以外に居住の方は、JPGU と物探学会両方の参加は大変だが1イベントに絞られていれば参加しやすいと思われる。</li> <li>・ 企業ブースの出展は JpGU の方が圧倒的にメリットあり (参加者数, 他分野、他業種との交流、学生参加者数)</li> <li>・ 企業の動向調査も JpGU のほうが優先度が高い。参加費は高くてもこちらのほうが選択しやすい。</li> <li>・ 学部生が無料なので、大学院での進路選択肢の一つに入れてもらえるようなアピールが可能。</li> <li>・</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 運営をボランティアベースのコンビーナー (物理探査学会員とは限らない) に任せることになり、セッションの予定が読みにくい</li> <li>・ 結局、学術講演委員会がセッションを立ち上げることになる可能性あり</li> <li>・ 発注者企業の方は JpGU に参加しないのではないか。</li> </ul>



\* 参考

会費リスト

会費 (2018 年度)	物理探査学会 会費	JpGU 会費
一般正会員	年 9,000 円	年 2,000 円
シニア正会員	年 4,500 円	年 2,000 円
学生正会員	年 4,500 円	年 1,000 円 (学部無料)
海外正会員	年 45 米ドル (相当)	

学会参加費リスト

2019 春学会	物理探査学会 参加費	JpGU 全日参加費 (会員割引料金)	JpGU 一日券 (会員割引料金)
一般	税込 7,560 円(事前) 税込 8,640 円(会場)	税込 22,680 円 (早期) 税込 30,240 円 (当日)	税込 14,040 円 (早期) 税込 19,440 円 (当日)
小中高教員, 大学 院生, シニア (70 歳以上の正会員)	税込 3,780 円(事前) 税込 4,320 円(会場)	税込 11,880 円 (早期) 税込 16,200 円 (当日)	税込 7,560 円 (早期) 税込 10,800 円 (当日)
学部生以下		無料	無料

学会投稿料リスト

2019 春学会	物理探査学会	JpGU
早期	(参加費に含む)	税込 3,240 円
通常	(参加費に含む)	税込 4,320 円

## 第3回学術講演会・国際シンポジウム将来構想検討委員会 議事録

日時：2019年5月17日（金）14：00～17：00

場所：物理探査学会 会議室

出席委員：尾西委員，村田委員，草茅委員，白石委員，鈴木委員，小西委員

欠席委員：上田委員，越智委員，野上委員，伊東委員

その他参加者：大澤理事，三木理事，鈴木（敬）理事

### 【配布資料】

資料① 前回（第2回）議事録

資料② 会員アンケートについて

資料③ 学会活性化につながる企画の立案について

資料④ 会員アンケート Web サービスについて

資料⑤ KSEG 関連

### 【内容】

1. KSEG 参加報告と今後の展開について（大澤理事より説明）
2. 会員アンケートの作成について
3. 今後の学会活性化につながる企画について

### 【決定事項】

1. 議論した内容で会員アンケート案を修正し、5/20の週に会員・広報委員会に提出する
2. 会員・広報委員会での承認が得られた後、会員一斉メールにてアンケート配信

### 【内容】

1. KSEG 関係
  - ・ 大澤理事より KSEG への参加報告があった。韓国地球物理学会との共催ではあったが、180名程度の参加者があった模様。懇親会が盛況だったようである。
  - ・ 今後の協力を進める方策として、まずは国内での講演会に互いに発表者を派遣すること、代表者を招待しあうことで合意したとのこと。
  - ・ 国際シンポジウムの協力方法としては、まず1,2セッションのコンビーナーを韓国側に依頼することが最も現実的である。
  - ・ 他国の方が国内学会に参加することが増えることを考えると、今後は国内の講演会においても、オープニングや基調講演のアナウンスには英語をいれること、図には英語のキャプションをつけること、タイトルは英語にすること、などを考えてはどうかという意見があった。
  - ・ 今後の詳細については、国際委員会で議論することになった。

## 2. 会員アンケートの作成について

- ・ 前回の理事会でアンケート実施についての承認は得たが、内容再検討の指示があったため、改めて内容を議論した。
- ・ 小西委員作成の修正案（資料②）について、前向きな改革に向けた文言を使う、特定の結論に誘導することを避ける、という観点で修正を議論し、委員会としての修正案を概ね決定した。（原稿を別途修正案としてメールにて関係者に配布済）
- ・ 上記修正案について、委員で確認後、会員・広報委員会に送付し承認をもらう必要あり。
- ・ アンケートの送付は、Web サービス（Questant）を利用する。本サービスの内容について、草茅委員より説明してもらった。有料サービス（1万円、3か月有効）を利用するためのアカウントは学会事務局で作成する。アカウント管理と結果の整理は、草茅委員と小西委員で行うことにする。
- ・ 学会事務局からの一斉メールで、上記 Web サービスへのリンクを送付し、回答者はそのリンクからアンケートページに移動し回答することになる。
- ・ メールアドレスが利用できない方（おそらく数 10 名程度）や、社内のセキュリティで上記アンケートページを閲覧できない方のため、物理探査学会の Web サイトにアンケートページへのリンクを貼ってもらうことにする。
- ・ アンケート実施と回答依頼を来月の春の講演会時に案内できるよう準備を進める。

## 3. 今後の学会活性化につながる企画について

- ・ 学術講演会に関わるものについては、会員アンケートの中で、特別イベントに期待しているかどうかを聞くことにする。
- ・ その他の様々なイベントの企画・実施にあたっては、各委員会の担当部分と重なることになる。たとえば同じようなイベントでも、学術講演会内で実施する場合と単独イベントとして実施する場合では担当委員会が違う。これらをうまく仕分けして提案することが重要である。
- ・ 各種の企画・イベントをアウトリーチ活動としてまとめて、それらを一括して管理する委員会があれば、それぞれの委員会での負担も減り、うまく運営できるのではないか、という意見があった。
- ・ 学生が集まるようなイベント（以前の学生向けのアイデアコンペティションなどを念頭）を企画すれば、その場に企業ブースを招致できるのではないか、という意見があった。またそのような企画ならば会社の人事部も興味がある、との話もあった。
- ・ 会員アンケートの取りまとめ後、学術講演会に関わる事項の提案が済んだら、今後の企画についても検討を進めることにする。

## 4. 今後の予定

- ・ 春の講演会までに会員アンケートを配布
- ・ アンケート配布後、1 か月をめどに結果の回収と整理、7/19 の理事会にて、結果のみ報告

- ・ アンケート結果を整理・分析して、次回の委員会（時期未定、夏～秋）で議論し、今後の方針を決める。
- ・ これまでの委員会での議論と合わせて理事会への提案書としてまとめる。

以上

（議事録作成 応用地質 小西千里）

## 第4回学術講演会・国際シンポジウム将来構想検討委員会 議事録

日時：2019年8月27日（火）14：00～17：00

場所：物理探査学会 会議室

出席委員：上田委員，草茅委員，白石委員，伊東委員，小西委員

欠席委員：尾西委員，鈴木委員，野上委員，村田委員，越智委員

その他参加者：大澤理事，三木理事，鈴木理事

### 【配布資料】

資料① 前回（第3回）議事録

資料② 会員アンケート結果まとめ

資料③ 自由コメント一覧

### 【内容】

1. 会員向けアンケート結果の確認と結果の分析
2. アンケート結果の公表（会員へのフィードバック）内容と方法
3. 将来への提案
  - ① 学術講演会の開催について
  - ② 国際シンポジウムの開催について
  - ③ その他のイベントについて
  - ④ 学会活動全般について

### 【決定事項】

- ・ 学術講演会の再編案を決定、次回の理事会で報告する。主な内容は以下の通り
  - 春の学術講演会は廃止し、一般の講演（発表）は行わない
  - 春は2日間の行事を実施（1日は総会と記念講演，もう1日はその他イベント）
  - 秋は通常通り開催、場所は東京と地方で隔年開催
- ・ 会員アンケート結果については、学会の会員専用ページに公開する。

### 【議論内容の詳細】

#### 1. 会員向けアンケート結果の確認と結果の分析

以下にアンケート結果の主なポイントを挙げる。

- ・ 回答者の半数が50代以上と、高齢化が明確（あくまで回答者の年代分布であるが、実際の年代分布でも同様である）。
- ・ Webアンケート結果によれば、多くの人が現状維持を希望しているように見える。年配の方ほどその傾向が高い。

- ・ 全体としては年2回の学術講演会を適当と考えているようである。ただし、30代、40代では年2回の学術講演会が多いと感じている割合が増える（30代では約半数が多いと感じている）
- ・ 学術講演会の参加目的としては年代を問わず「講演聴講」が多いが、半数の方が「会員との交流・人脈形成」を選択している。
- ・ 今後の学術講演会に期待されているのは、「講演数の増加」、「新しいセッションの設置」、「特別イベントの充実」である。
- ・ 自由意見が非常に興味深い。勉強会の主催を提案するものがあり、辛辣な意見、学会スリム化の提案なども含まれていた。参加費や学会費の低減を求めるものも多い。国際シンポジウムへの提案も含まれていた。

アンケート結果を踏まえ、議論を行った。以下にコメントをまとめる。

- ・ 現状を維持したいという意見は、明確な意思というよりは、単に変化を嫌うことによる結果ではないかと推測する。
- ・ 自由意見で提案された、「勉強会を主催したい」というような会員の意見をくみ取るような仕組みが必要ではないか。
- ・ 自由意見に「会員数も少ないため、物探学会での発表は成果を閉じ込めてしまう」という記載があったが、それに対しては学会として以前から問題意識を持っており、会誌編集委員会でラビットレターを創刊したという経緯がある。
- ・ 特別イベントを充実してほしいという結果について、例えば若手セッションとすると、参加者は若手のみに絞り年配の参加は認めないのか、講演集としては通常通り予稿集を書くのか、あるいは簡単なアブストラクトのみとするのか、学術講演会内でのセッションとするか別枠とするか、など具体的な事項を決めていかないと了解は得られないだろう。
- ・ 参加費の軽減を求めている方が多いが、一方では参加費の高いJpGUでのセッション立ち上げを求める意見もある。安くすればよいという問題でもなさそう。石油技術協会のように、講演会への参加は無料、講演集の購入は有料といった運営もある。

## 2. アンケート結果の公表（会員へのフィードバック）内容と方法

- ・ 学会会員ページ（ログインしてみられるところ）にアンケート結果をすべて公開することについては問題ない。
- ・ 学会会員ページへの公開期間は来年の総会までとする。
- ・ 実際の公開は次回理事会後とし、会員広報委員会に依頼する。
- ・ アンケート結果に対する所見を含めるかどうかは理事会の意見に従う

## 3. 将来への提案

### ● 学術講演会の開催について

当委員会発足の目的である学術講演会の再編案として、春の講演会の一般講演を廃止し、総会と記念講演のみにすることを委員長より提案した。会員アンケート結果では現状維持を希望する意見

が多いが、今後の学会を担う 30 代、40 代では 1 回でよいという意見も多い。多くの方が「講演聴講」を参加目的としているが、これまで通りの一般講演が増えることを望んでいるとは思えず、むしろ新セッションの設置や特別イベントなど、内容の充実を期待していると考えられる。また、参加目的として「会員との交流・人脈形成」を挙げる方も多く、学術講演会でなくとも会員が集まる機会を減らさなければよいともいえる。これらのことから、春の学術講演会は廃止し、総会の翌日もしくは前日に別途イベントを設けることで、それらの目的は達成できると考える。別途イベントとしては、ワンデーセミナーや各種研究発表会（地盤探査、電気探査、地震防災、ドローン）といった既存企画あるいは、新規に企画するものを想定している。秋の学術講演会については、通常通りの 3 日間開催とし、場所は東京と地方で隔年開催とする。

上記の提案を実施するにあたっては、以下のような問題が想定される。これらの問題については、各委員会で具体的に検討してもらうように理事会で提案する。

- ・ 講演会参加費、企業展示費用の収入がなくなることによる学会収益への影響
  - ・ 実施するイベントによって主幹する委員会が毎年変わる可能性がある。担当する委員会を決める、あるいは委員会の役割を再編する必要がある
  - ・ 新イベント（例えば新しい研究会）を企画するのであれば、担当する委員会、学会の定款の見直しなどを考える必要がある
  - ・ 春の学術講演会を廃止することで、これまで学術講演委員会が行っていた総会会場手配などの担当を考える必要がある
  - ・ 秋の学術講演会のスケジュールについて（発表数が増加する可能性等を考慮する）
- 国際シンポジウムについて
- 2021 年の秋の学術講演会（北海道大学の予定）で国際シンポジウムを連続して開催してはどうかという案があり意見交換を行った。挙げた意見は以下の通り
- ・ 両学会参加で 1 週間の国内出張ができる人も少ないのではないかと懸念がある。
  - ・ この年は学術講演会も英語で行えばよいのでは（つまり国際シンポジウムに含めてしまう）
  - ・ 国際シンポジウムの中で日本語のセッションを入れてはどうか
  - ・ 同時並行で学術講演会と国際シンポジウムのセッションを開催し、好きな方に参加できるようにする。レセプションやフィールドトリップは一緒に行う。この場合、参加費は国際シンポジウムに合わせる

● その他

学会の会員数増加、知名度 up に向けた活動について、意見を出し合った。

- ・ 未だに物理探査の知名度は低いので、市民講座やキャンパスビジットといった活動は重要であろう
- ・ JpGU での広報は、物理探査を学生に知ってもらうため、また会員企業の紹介の場としても有益であり、続けるべき

- ・ 海外で実施されている Geo クイズのような学生イベントに積極的に参加させる仕組みが必要ではないか
- ・ 現状、物理探査関係に積極的に進もうとする学生の数は少なく、興味もあまりないように見える。就職先としてはネームバリューと収入を重視する傾向が強く、石油関連業界（商社含む）に進みがちである。
- ・ 企業でのインターンシップ、現場体験などの経験があると、学生も興味を持ち始めるようなので、学会としてそういった機会を紹介するお手伝いができるとういのではないか
- ・ 学会として、企業の合同学生向けセミナーの主催、インターンシップの窓口などの活動ができれば、学生と企業の双方にもメリットがある。賛助会員へのサービスとしても提案できるのではないか。

（文責：小西）



## 学術講演会に関するアンケート結果

学術講演会・国際シンポ将来構想検討委員会

委員長 小西 千里

学術講演会の開催方法についてのアンケート調査

(集計期間 2019/6/1～2019/7/5)

アンケート調査は、回答数 330 を得ることができました。ご協力ありがとうございました。

正会員数は、平成 31 年 3 月末時点で 1125 名（平成 31 年／令和元年度通常総会資料より引用）であるため、全正会員の 1/4 以上の回答となります。

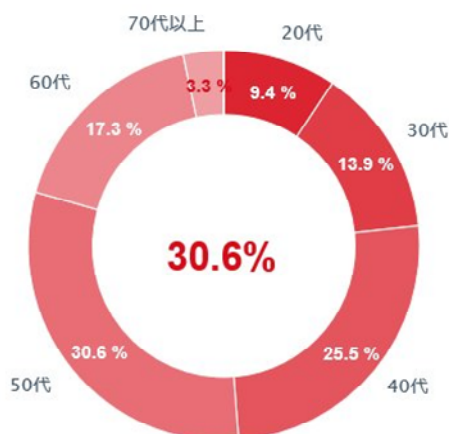
以下、各設問に対する回答結果を示します。

### Q1.

あなたの年齢はいくつですか？

(回答数: 330)

ここにコメントが入力できます。

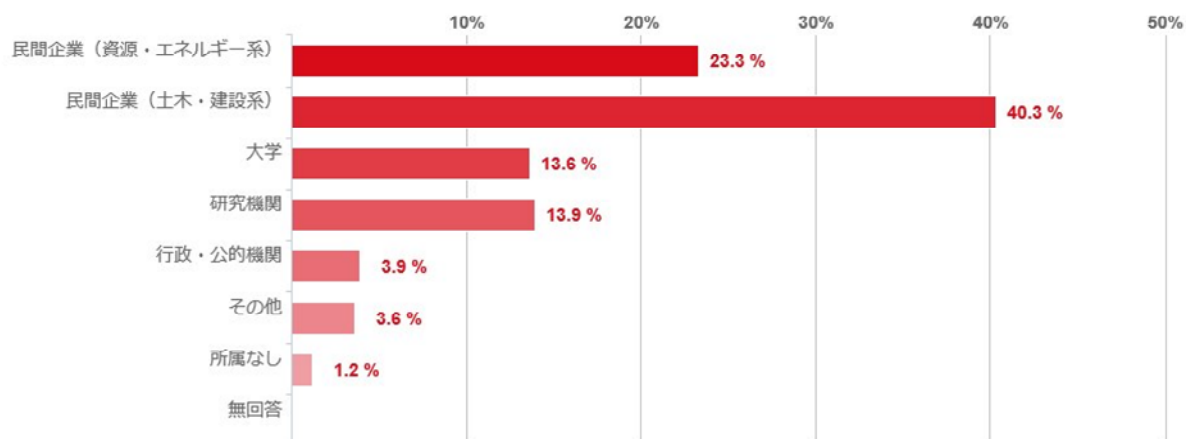


## Q2.

あなたの職業は何ですか？

(回答数: 330)

ここにコメントが入力できます。



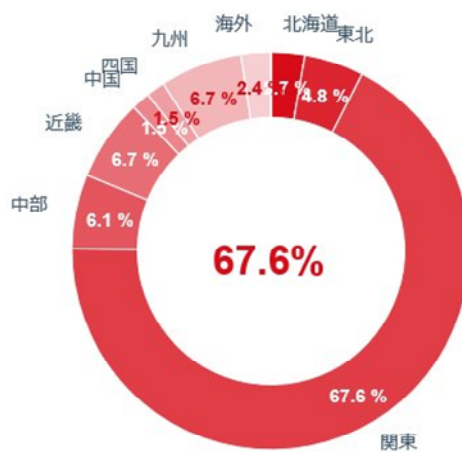
表示

## Q3.

あなたの勤務地はどこですか？

(回答数: 330)

ここにコメントが入力できます。

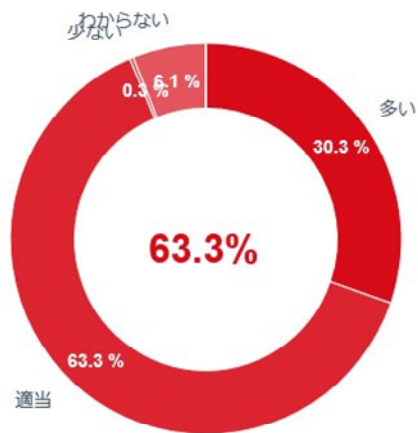


### Q4.

現状の学術講演会の開催数(年2回)についてどう思いますか？

(回答数: 330)

ここにコメントが入力できます。

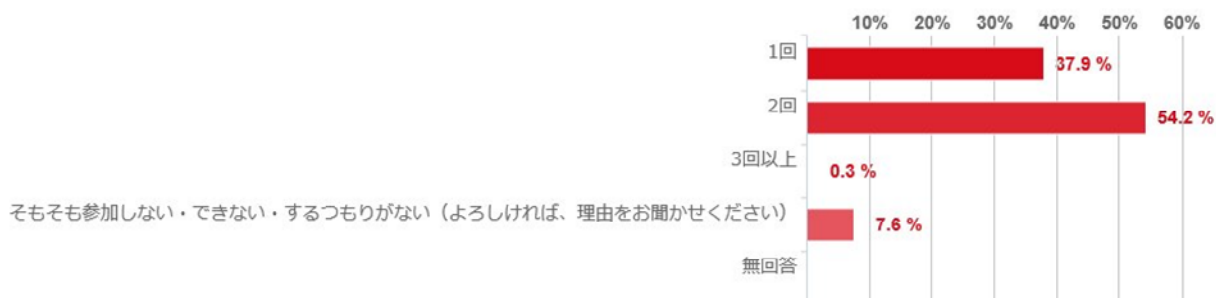


### Q5.

学術講演会の回数(1年に何回開催するのがよいですか？)

(回答数: 330)

ここにコメントが入力できます。



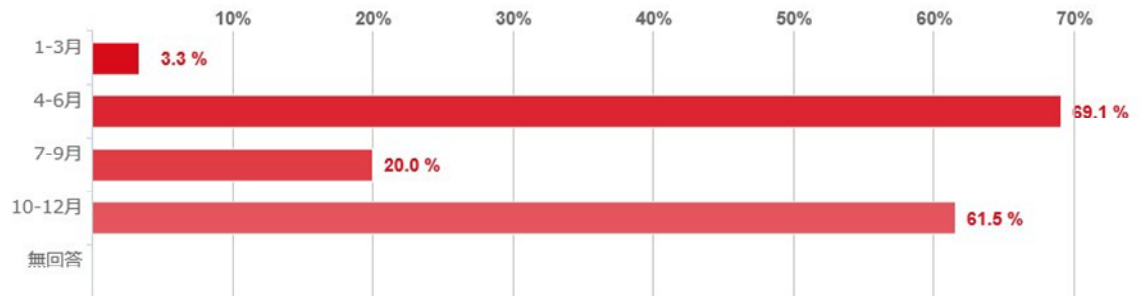
### Q6.

学術講演会の開催時期は、いつを希望しますか？（複数回答可）

（注：定款により、学術講演会の時期によらず、4-6月には総会が開催されます。）

（回答数: 330）

ここにコメントが入力できます。

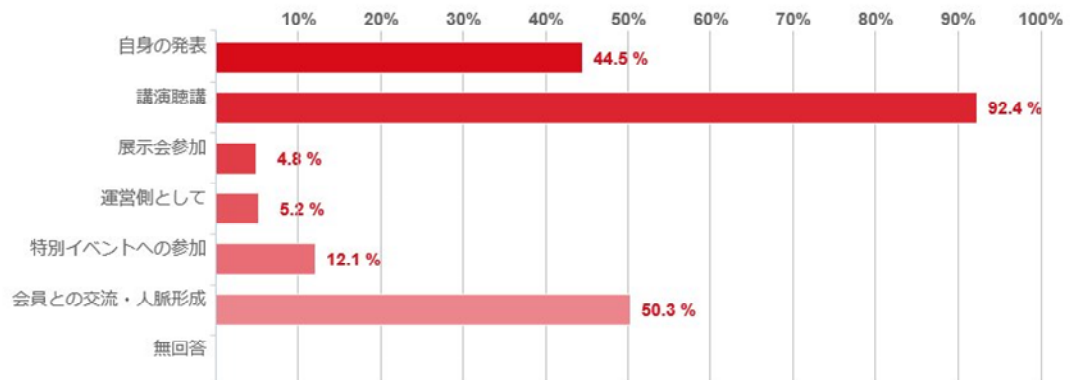


### Q7.

学術講演会に参加する主な目的は何ですか？（複数回答可）

（回答数: 330）

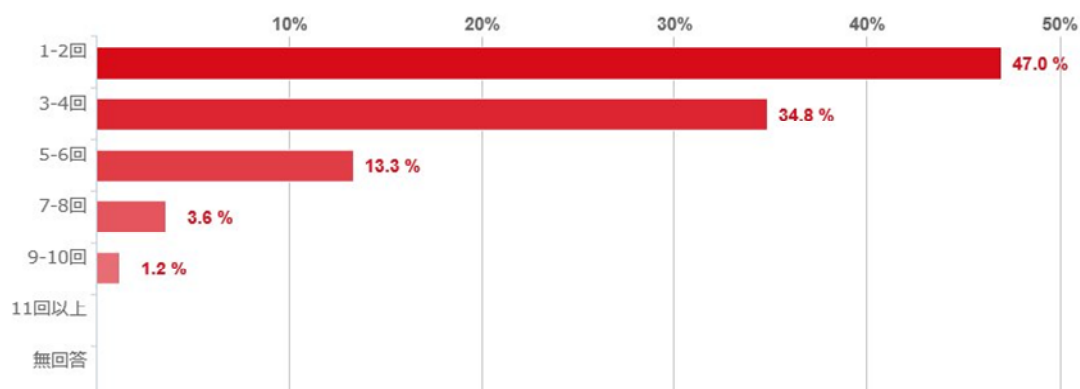
ここにコメントが入力できます。



### Q8.

他学会も含め1年間に何回程度、学会(講演会・シンポジウム)に参加していますか？  
(回答数: 330)

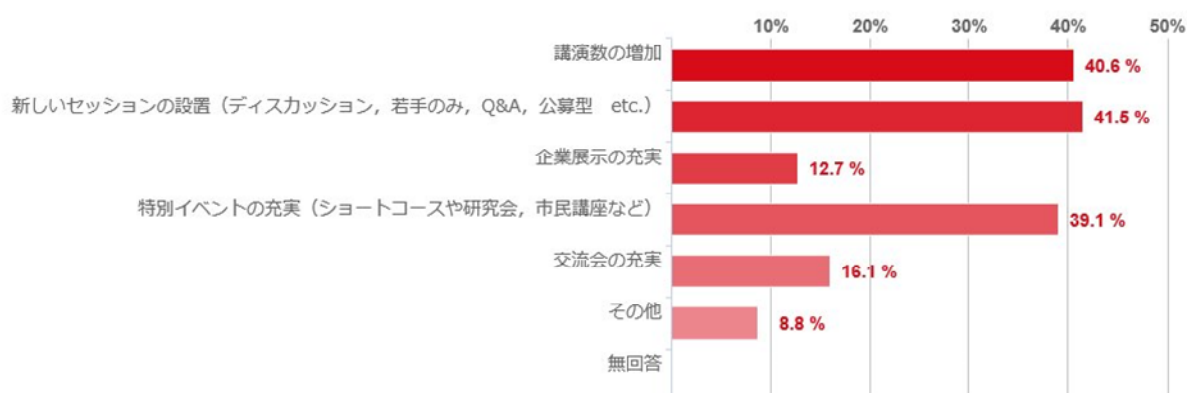
ここにコメントが入力できます。



### Q9.

今後の学術講演会に期待することは何ですか？(複数回答可)  
(回答数: 330)

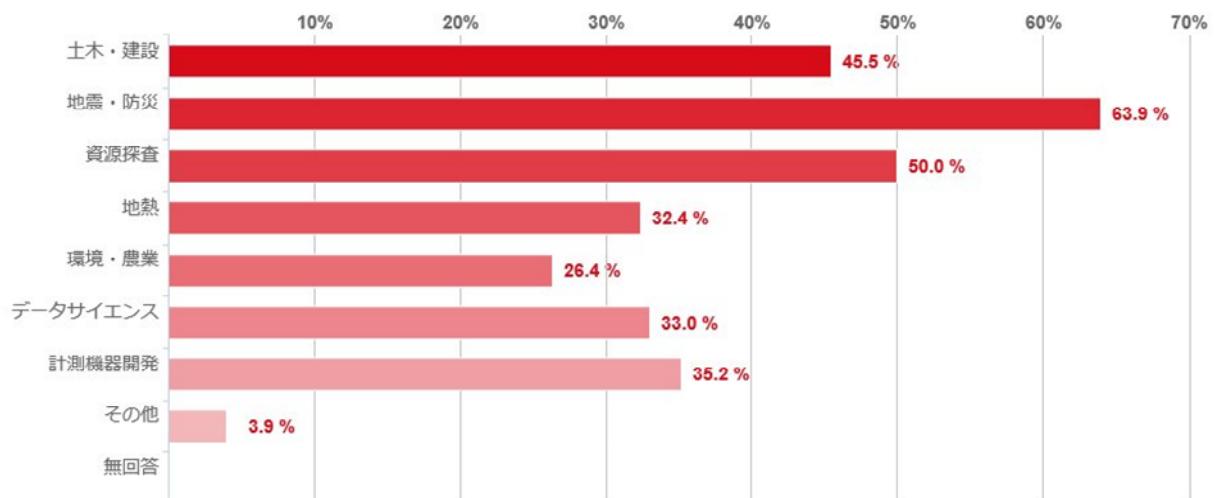
ここにコメントが入力できます。



### Q10.

今後、特に聴講したい分野は何ですか？(複数回答可)  
(回答数: 330)

ここにコメントが入力できます。

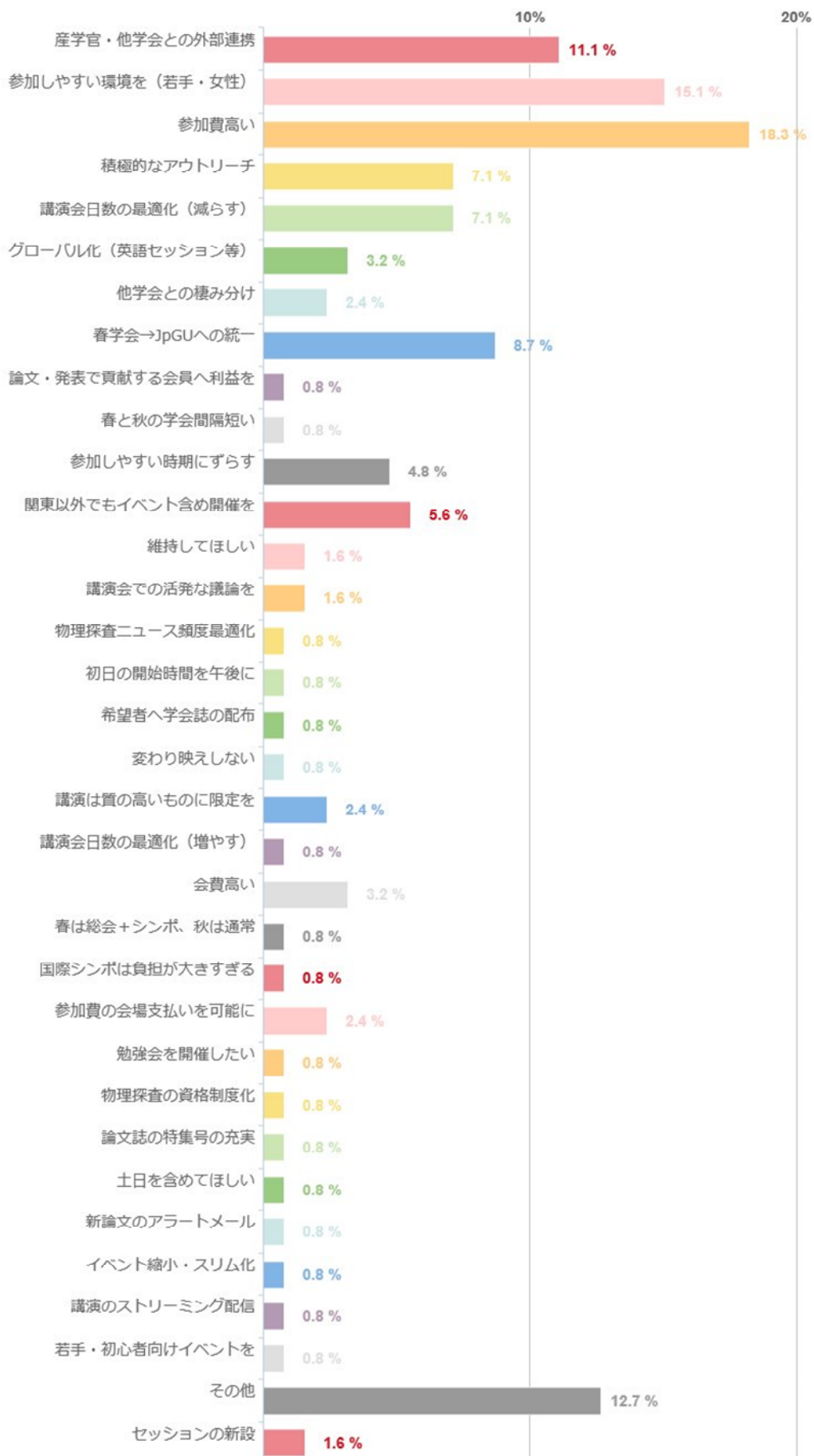


### Q11. 自由コメント

頂いたコメントを内容別に整理しまとめたのが次ページの図であり、実際に頂いたコメントは、本報告最後に掲載しています。

## Q11S1FA.

(回答数: 126)



以下、主な設問に対する回答を年齢毎に分析した結果を示します。

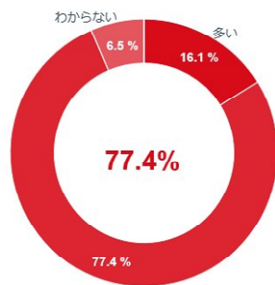
Q4.

現状の学術講演会の回数数（年2回）についてどう思いますか？  
（回答数 330）

"Q1"で"10代"を選んだ回答者 (回答数: 0)

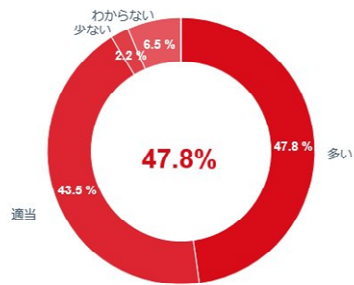
0.0%

"Q1"で"20代"を選んだ回答者 (回答数: 31)



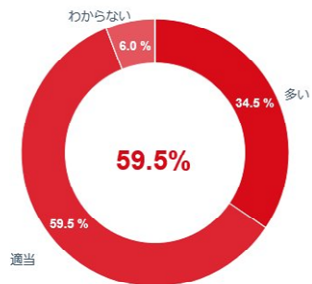
適当

"Q1"で"30代"を選んだ回答者 (回答数: 46)



適当

"Q1"で"40代"を選んだ回答者 (回答数: 84)

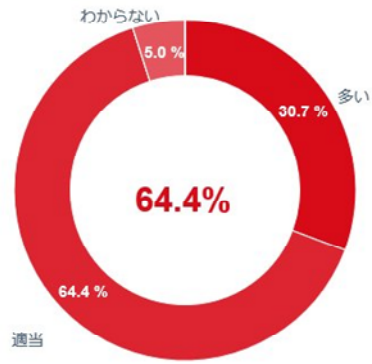


適当

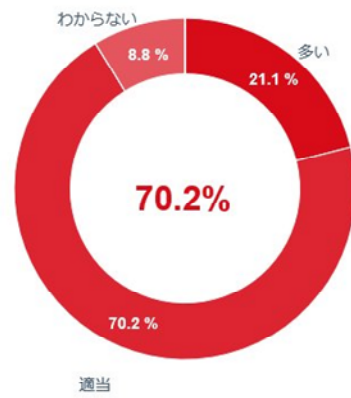


Q1

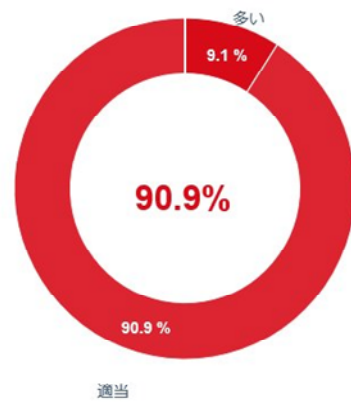
"Q1"で"50代"を選んだ回答者 (回答数: 101)



"Q1"で"60代"を選んだ回答者 (回答数: 57)



"Q1"で"70代以上"を選んだ回答者 (回答数: 11)



"Q1"で"無回答"を選んだ回答者 (回答数: 0)

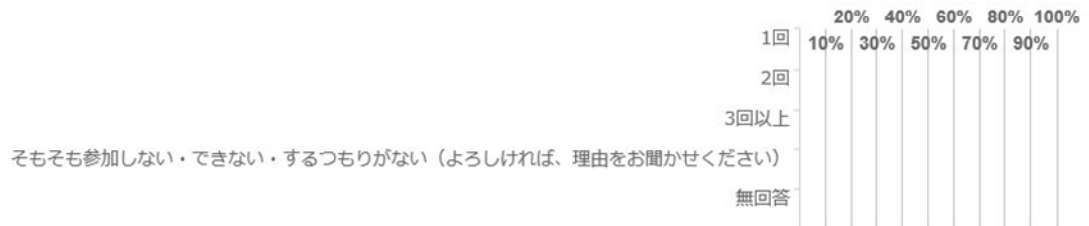
0.0%

## Q5.

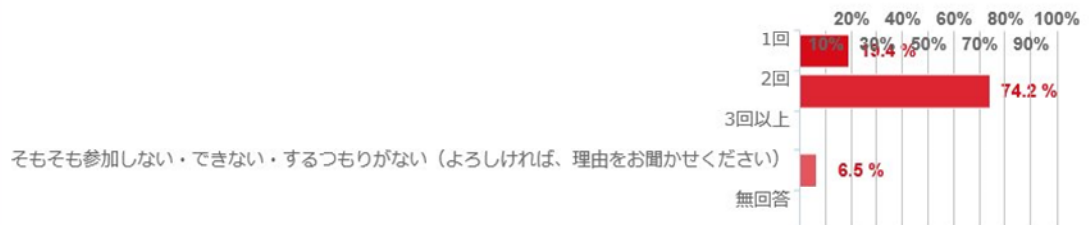
学術講演会の回数は1年に何回開催するのがよいですか？

(回答数 330)

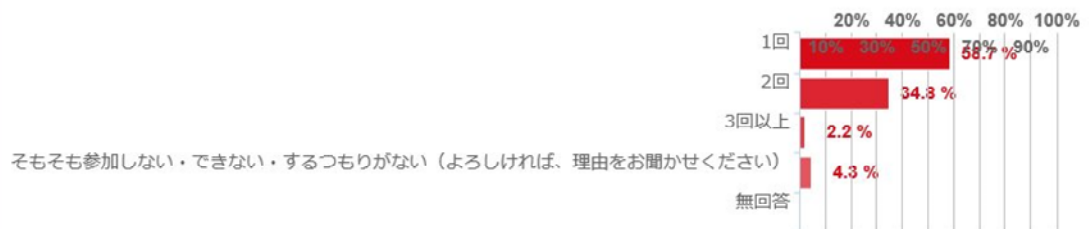
"Q1"で"10代"を選んだ回答者 (回答数: 0)



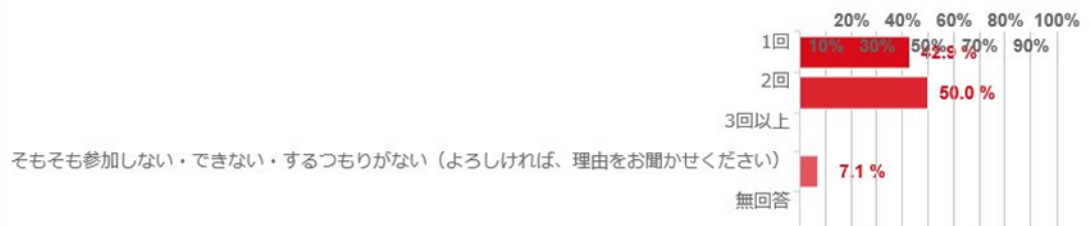
"Q1"で"20代"を選んだ回答者 (回答数: 31)



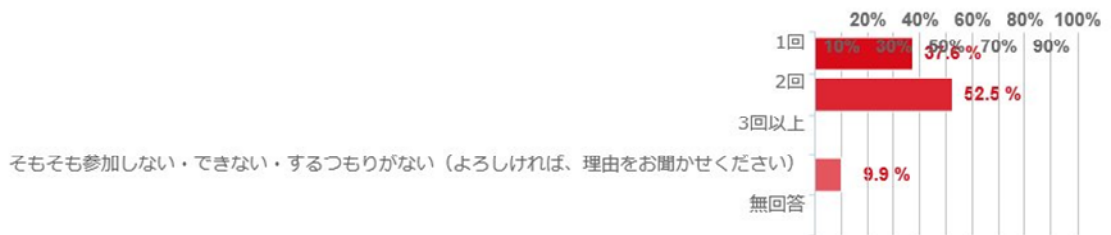
"Q1"で"30代"を選んだ回答者 (回答数: 46)



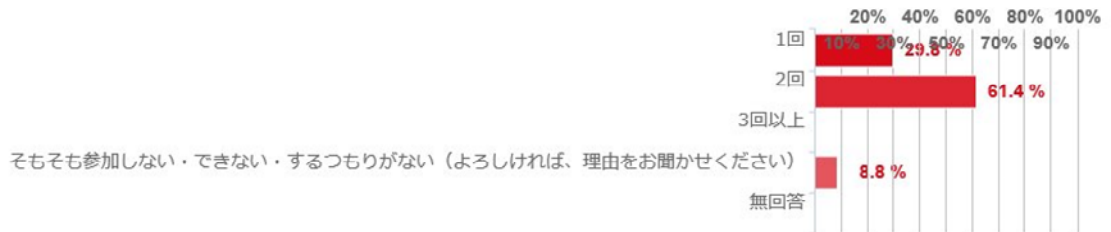
"Q1"で"40代"を選んだ回答者 (回答数: 84)



"Q1"で"50代"を選んだ回答者 (回答数: 101)



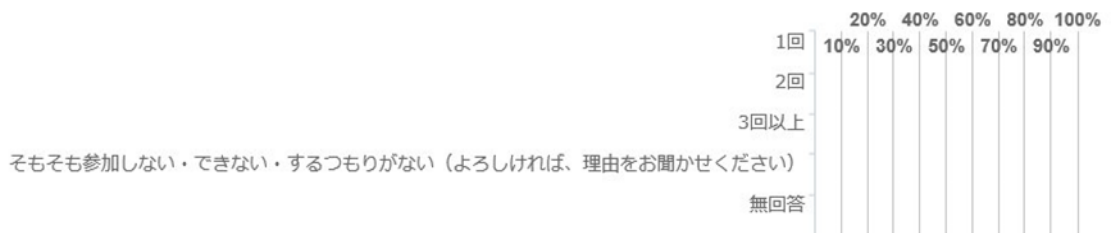
"Q1"で"60代"を選んだ回答者 (回答数: 57)



"Q1"で"70代以上"を選んだ回答者 (回答数: 11)



"Q1"で"無回答"を選んだ回答者 (回答数: 0)

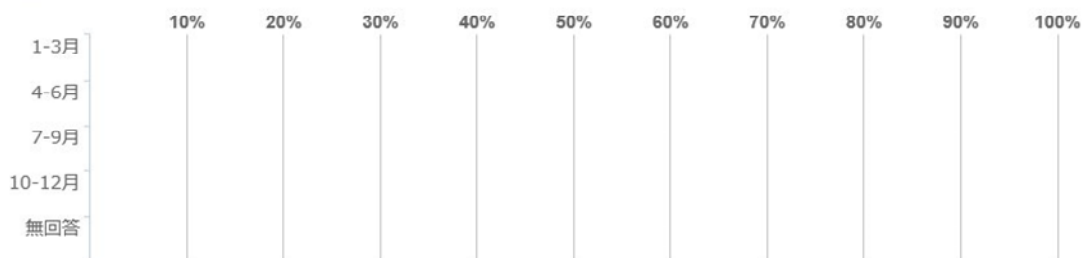


Q6.

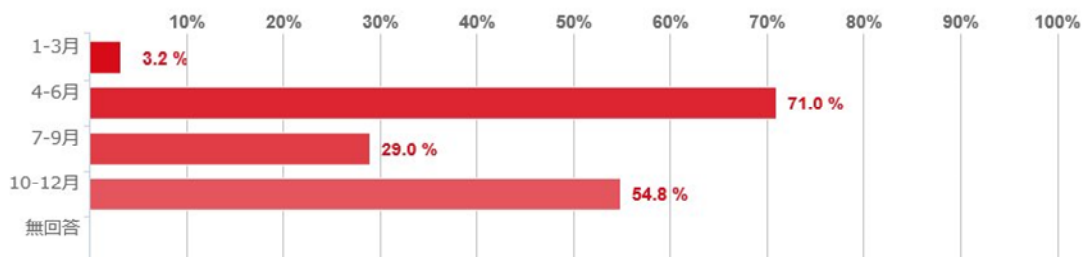
表示

学術講演会の開催時期はいつを希望します？（複数回答可）  
（回答数 330）

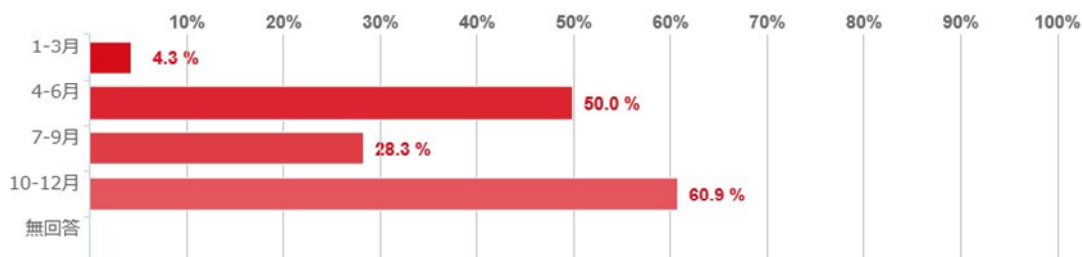
"Q1"で"10代"を選んだ回答者 (回答数: 0)



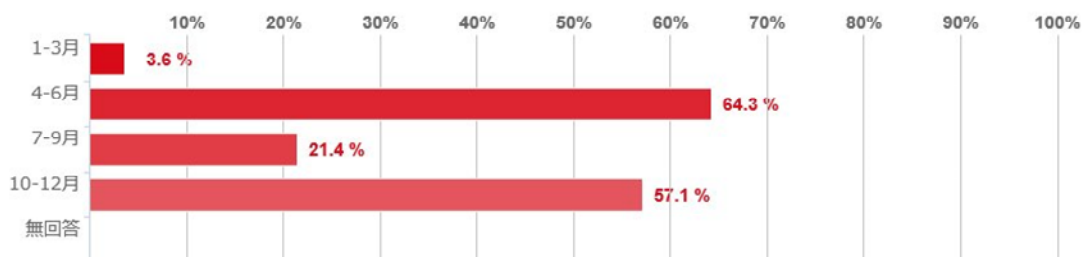
"Q1"で"20代"を選んだ回答者 (回答数: 31)



"Q1"で"30代"を選んだ回答者 (回答数: 46)

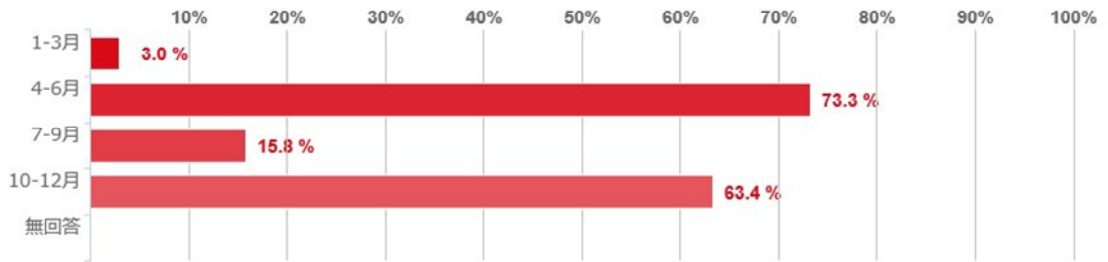


"Q1"で"40代"を選んだ回答者 (回答数: 84)

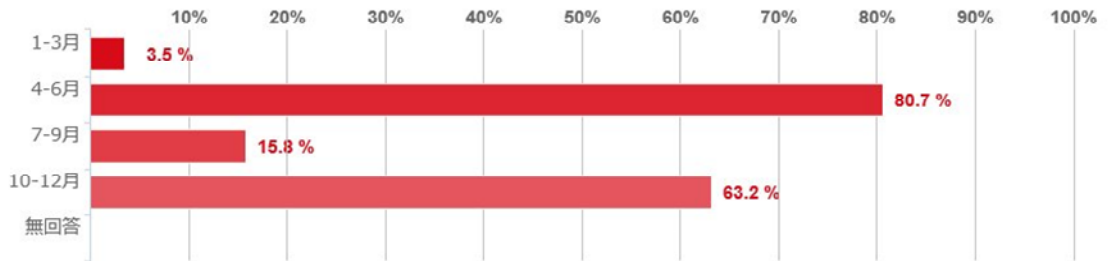


Q1.

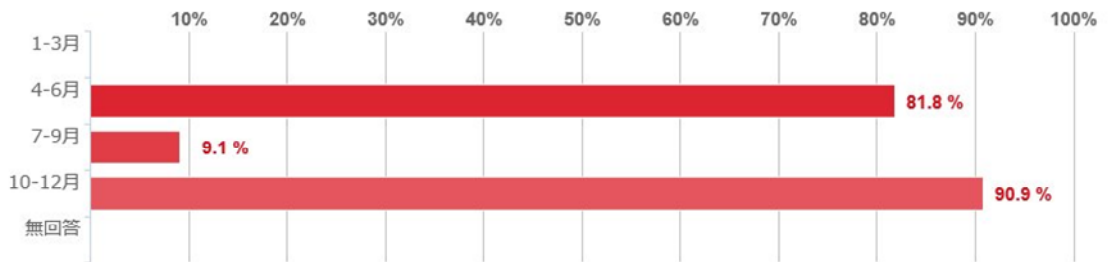
"Q1"で"50代"を選んだ回答者 (回答数: 101)



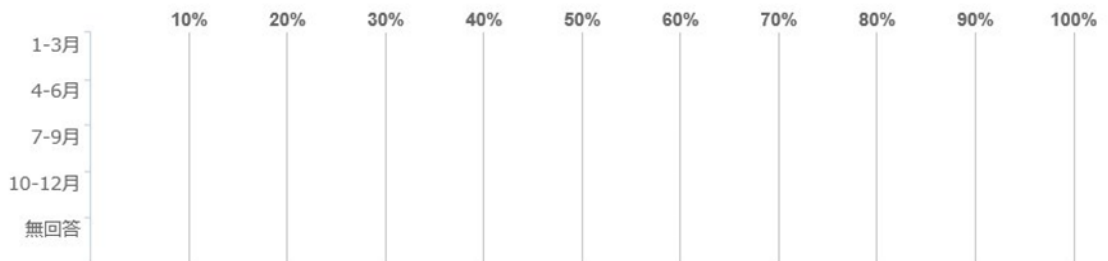
"Q1"で"60代"を選んだ回答者 (回答数: 57)



"Q1"で"70代以上"を選んだ回答者 (回答数: 11)



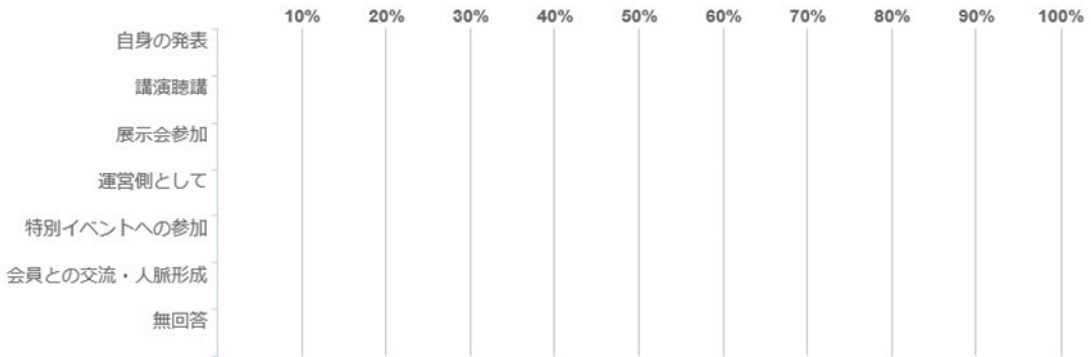
"Q1"で"無回答"を選んだ回答者 (回答数: 0)



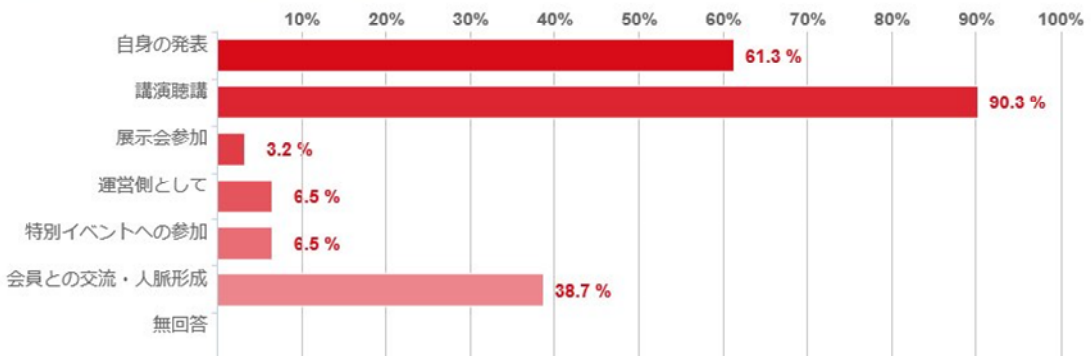
Q7.

学術講演会に参加する主な目的は何ですか？（複数回答可）  
 （回答数 330）

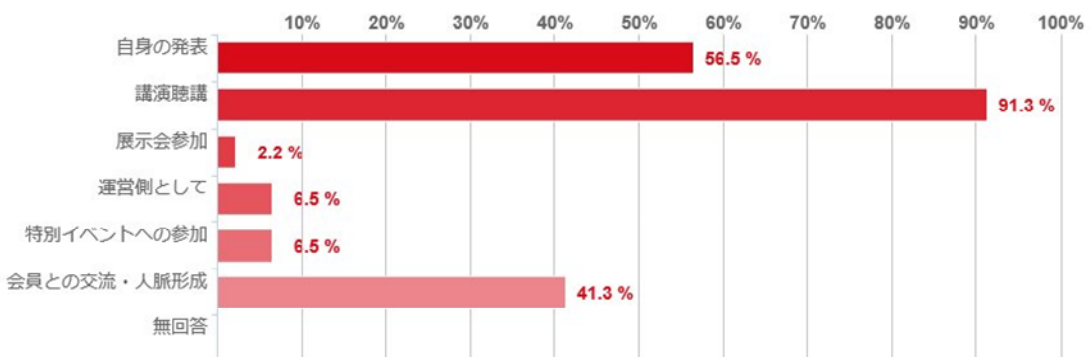
"Q1"で"10代"を選んだ回答者 (回答数: 0)



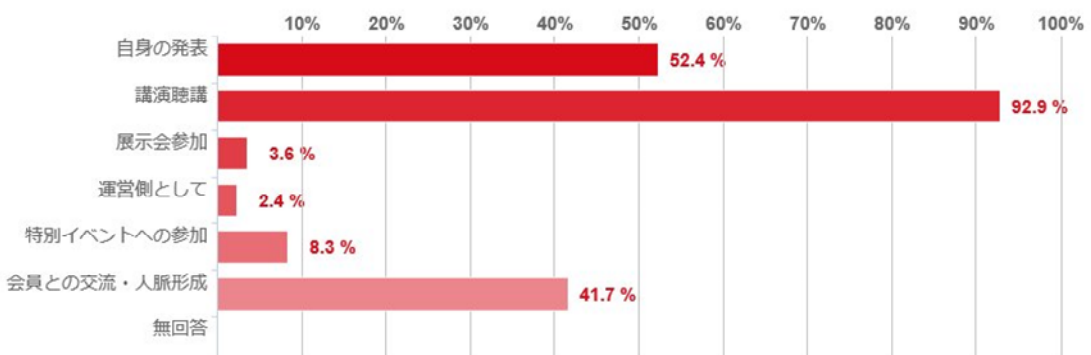
"Q1"で"20代"を選んだ回答者 (回答数: 31)



"Q1"で"30代"を選んだ回答者 (回答数: 46)

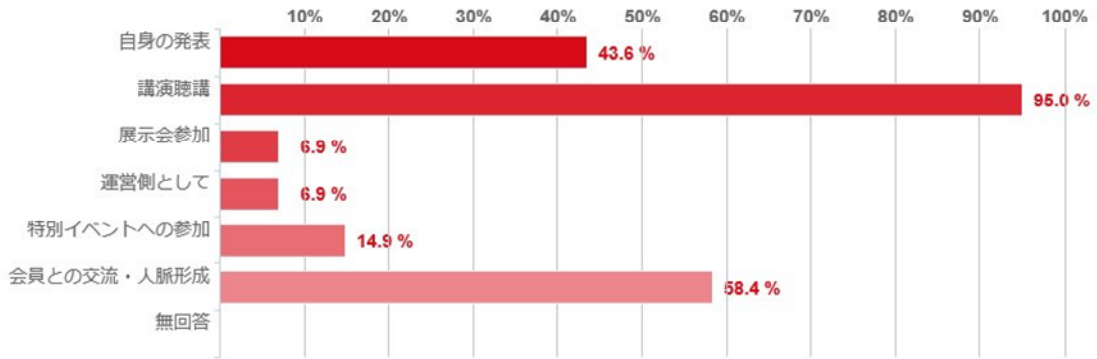


"Q1"で"40代"を選んだ回答者 (回答数: 84)

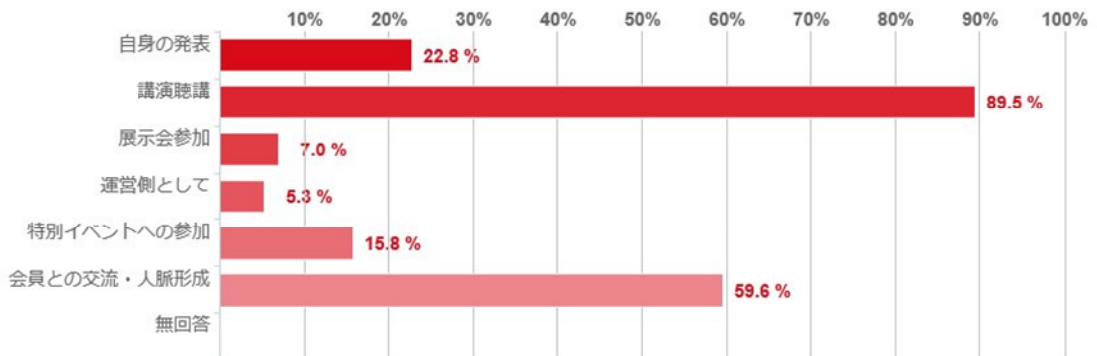


Q1.

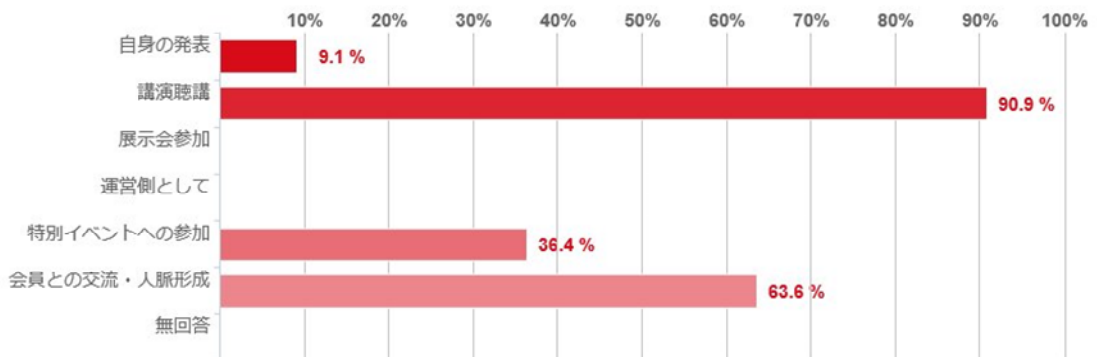
"Q1"で"50代"を選んだ回答者 (回答数: 101)



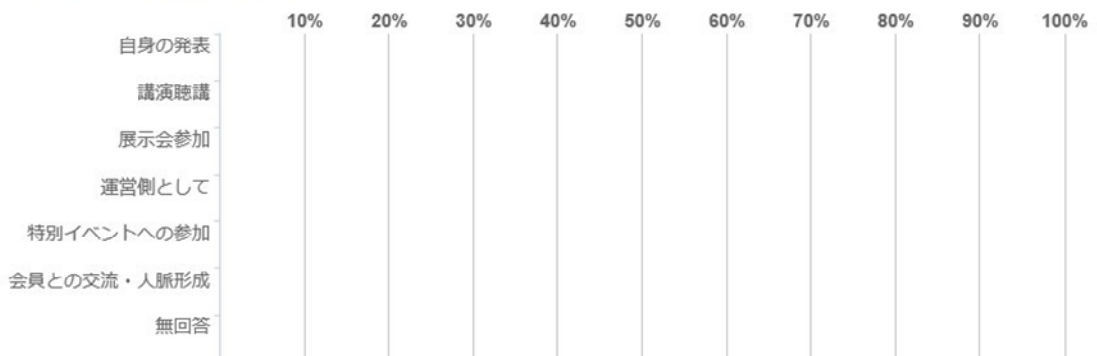
"Q1"で"60代"を選んだ回答者 (回答数: 57)



"Q1"で"70代以上"を選んだ回答者 (回答数: 11)



"Q1"で"無回答"を選んだ回答者 (回答数: 0)



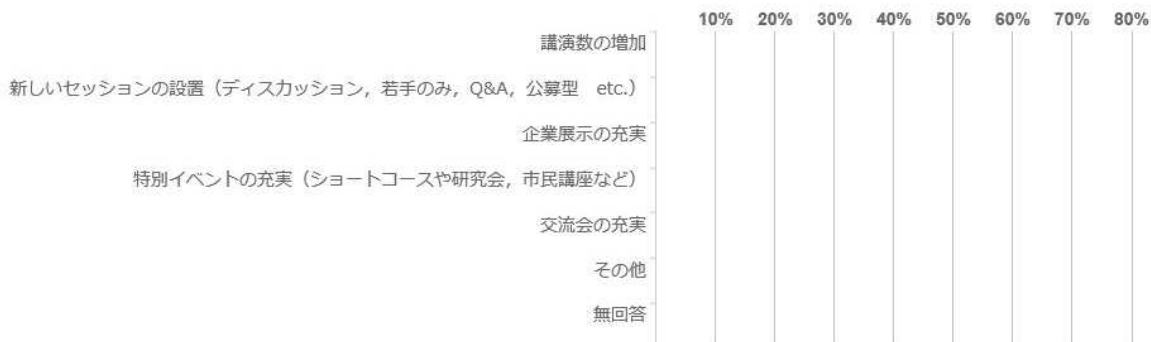
Q9.

表示

今後の学術講演会に期待することは何ですか？（複数回答可）

（回答数 330）

"Q1"で"10代"を選んだ回答者 (回答数: 0)



"Q1"で"20代"を選んだ回答者 (回答数: 31)



"Q1"で"30代"を選んだ回答者 (回答数: 46)



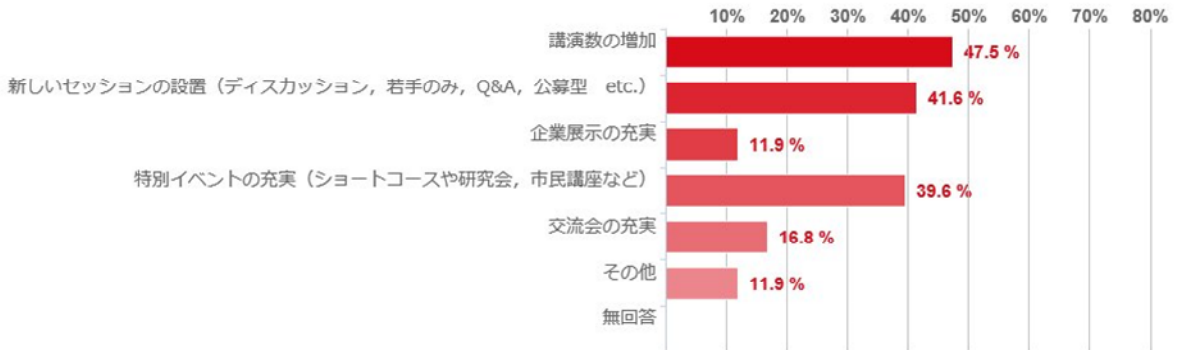
"Q1"で"40代"を選んだ回答者 (回答数: 84)



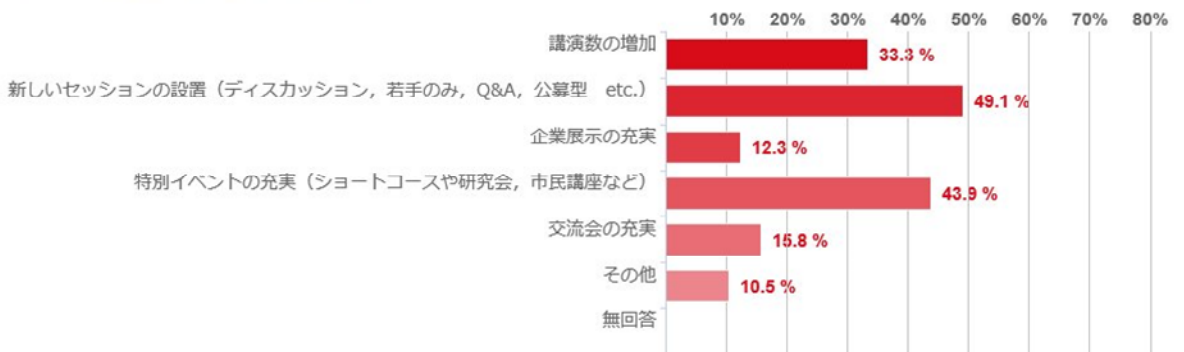


Q1.

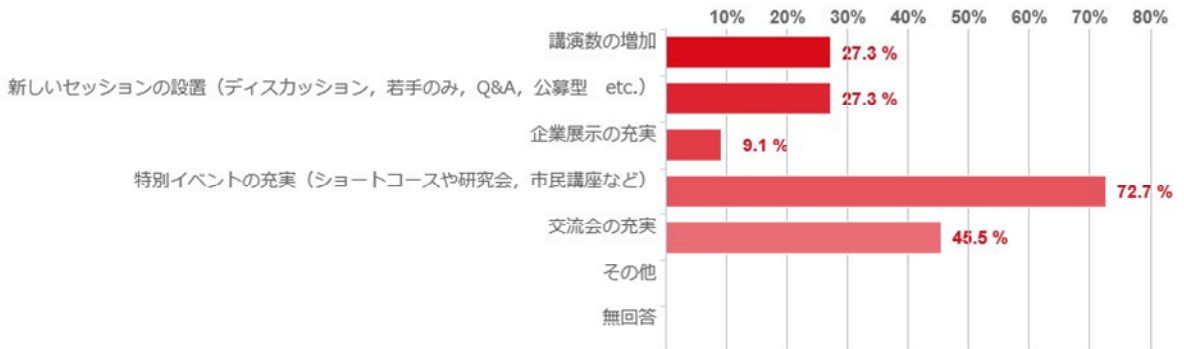
"Q1"で"50代"を選んだ回答者 (回答数: 101)



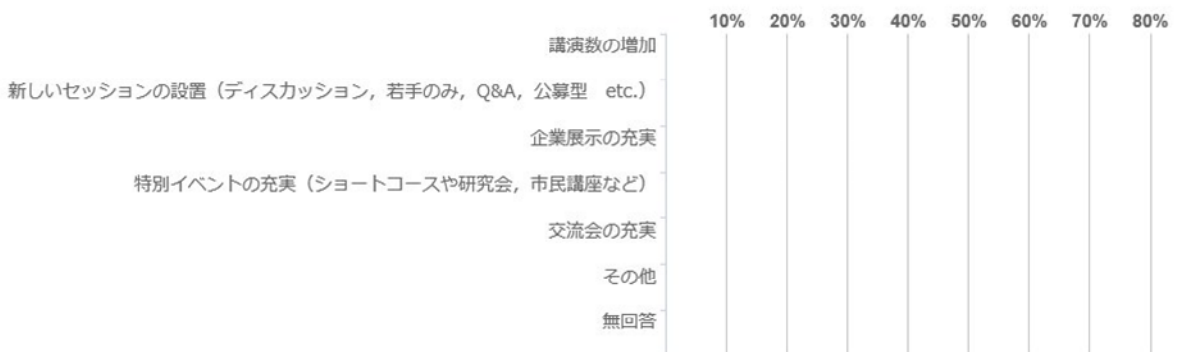
"Q1"で"60代"を選んだ回答者 (回答数: 57)



"Q1"で"70代以上"を選んだ回答者 (回答数: 11)



"Q1"で"無回答"を選んだ回答者 (回答数: 0)



## 【自由コメント一覧】

1. 地質学会や土木学会、関連する産官学との連携で、資源、防災、環境などの対象別の特別講演会を企画してはどうか
2. いろんな分野が混ざった牧歌的な雰囲気は嫌いではないが、若手同士の発表、交流の場があるとなお良い
3. 参加費を若干下げてほしい。
4. 専門にとらわれず学生の参加を促す内容や情報伝達を行う。
5. 一般の人への宣伝・認知
6. 一般市民向け、あるいは、高校生向けの行事も組み込み、地球物理系の学問や実践活動を広く知っていただき、この業界の理解者を増やせていけるような活動をしていきたい。
7. 回数年間 2 回でも良いと思いますが日数は、講演数にもよりますが 2 日で十分かと思います。
8. 学生が参加しやすい学会に。若手優秀賞に商品券などを授与するなど。
9. 参加費を下げてほしい
10. 学会のグローバル化を期待します(例えば、英語によるオーラルセッション擁立や春公演を英語化=毎年国際シンポジウム相当)・国際シンポジウムの参加費があまりに高い。
11. 国際シンポジウムの参加費が高いので、再考お願いしたい。資源系の人間にとっては SEG や EAGE があり、SEGJ の会員であるメリットがなく何らかの工夫が必要かと考えます。
12. 春は合同学会があるはずなので、ソチらと一緒にしたほうが良いと思う。
13. 論文や学会発表する会員①とそうでない会員②の会費に差をつけてほしい。①の会員は、投稿料なしで、②の会員で発表したい場合には、投稿料を別途もらえばいいと思う。
14. 物理探査学会員が減少していることを鑑み、事業活動の縮小を検討することを思料します。例えば、学術講演会の開催期間を 3 日→2 日。物理探査ニュースの発信頻度を年 4 回→年 3 回とする等。
15. 春季と秋季の開催期間のインターバルが短い
16. 市民講座的なイベント、
17. 学術講演会は 2 日間に凝縮できないか。
18. 春季学術講演会をやめて、JpGU 内でセッションを立ち上げてほしい。
19. 学術講演会の時期を、関連他学会の開催時期と極力離してほしい。集客の問題はあると思いますが、様々な行事(秋の学術講演会以外の)を、時には、関西など東京以外でも開いてほしい。
20. 今後も学会が皆の交流の場・研究発表の場として機能し、長く存続して欲しい

21. JpGU 後の春の学会は内容に乏しい感じがする。
22. 学術講演会の参加費低減。②他学会との連携を強化し、相互に講演が増やせるような協力体制などが築けるようにして欲しい（目的：新規人脈形成、新規事業への展開）。
23. 学術講演会での活発な議論を期待します。
24. 会員が少しずつでも増加していく様な魅力的な学会にして欲しい
25. 開催時間の適切な設定
26. 地方から移動を考慮し、初日は午後開始として欲しい。また、年二回は多いので年一回開催が良いのではないのでしょうか。
27. 学会誌を希望者に配布
28. いつものように同じメンバーで、同じ話が多いと感じる。逆に、検証された質の高い研究内容だけで講演会を構成したほうが良いのでは。
29. 他学会との合同セッション・連携 講演時間の拡大, 特にディスカッションの活発化 診断なきお遊び結果発表の排除
30. 年会費を下げしてほしい
31. 若手参加者の増加
32. 学生がもっと発表できる学会でかつ学生コミュニティを促す補助があるといいと思えた。春季秋季を統合した年1回の東京以外の開催を希望します。
33. 他分野の学会との研究交換。例えば応用地質学会との講演会の合同開催。その効果は、①独善化の防止(物探は独りよがり)、②応用分野の拡大(地質屋に使わせる)、③意見交流(素人の意見は大事) などである。地質屋と物探屋の意見交換の場があってよい。地質屋を使いこなす心意気が大事。
34. 地球惑星連合会は、参加費が高く、大きすぎる。
35. 留学生など外国人が参加しやすい環境を整えてほしい（例えばポスターの表記は英語にするなど）。
36. 学術講演会の開催に関しては、春に総会+シンポジウム（+懇親会）、秋に学術講演会というスタイルでいいと思います。そのような他学会も多いかと思います。
37. 国際シンポは負担が多く迷惑と感じている。
38. 会場で決済できるようにしてほしい。当日スケジュールが空いた時に、急遽、出席することが難しくなりました。
39. 純粋な技術で議論したい。メーカーの横やりで発表内容を変更させられ、それから発表を控えています。
40. 希望するというより、私自身が取り組みたい活動があります。物理探査に携わる若手技術者・研究者と物理探査や地球物理系の学生が交わる勉強会を開催したいです。以前、理学系の某学会関係の大学院生主体の勉強会に参加したことがあります。そこで、様々な大学の方と交流ができ、今でも学会に行けば良く雑談したり、研究の話をしたりしま

す。このような機会は非常に良い機会になると思うので、物理探査でも、そのような機会を設けたいです。もし、このような機会を立ち上げたいと考えている方が居りましたら一緒に運営したいです。

41. 講演申込の締め切りが早い 英語のセッションが少ない 学生（修士以下のみ）セッションを作り、議論させる 参加費が高い -受付に人が多い -予鈴、マイク回しに人を充てる必要はないと思う（座長が一人で行う、バイト不要） -開催日数、1ないし2日とし、短縮する（一年2回は必要だと思う） -ほかの学会と日程をあわせ講演や交流会の会場をシェアする
42. 学生・大学研究者の発表が増えてほしい。
43. 発表しやすい状況にして講演数が増加することを期待したい。
44. 週末開催や期間短縮（例えば2日間）することで、参加者（発表者）が増えるように思います。
45. 物理探査を儲かるビジネスにしてください。
46. 他分野の学会との連携を考えて欲しい
47. 企業の発表を増やすように工夫がほしい。技術士継続教育 CPD を獲得しやすいように優秀発表賞を増やすと、企業の参加者が増えるのではないかと思います。
48. 投稿数が少なくなっているため、開催期間を2日に短縮してもいいように思います。
49. 他の関連学会と連続すると参加しにくい。たとえば JpGU とか地震学会とかの講演会の日程と近くならない方がありがたい。
50. 測定機器の展示等の機会があっても良い。
51. 学術講演会に関しては、参加費を下げたい。
52. 他学会との交流の機会を作りたい。
53. 物理探査士みたいな物理探査に関する知識、周辺知識等を保証、認定する資格、マイスター制度があれば、お金儲けになるかもしれません。現実問題、この会員数ではキャパ的に難しいかもしれませんが。
54. 他の学会や組織との共催としての行事があると交流や他の分野の情報（物理探査に期待する事など）が得られると思う。
55. 学生の参加費を無料にしたい。
56. 論文集の特集号の充実。
57. 春の講演会は、JpGU に統合し JpGU にて物探のセッションを増やして欲しい。それを合わせて2回で良いのではないかと思います。
58. 学生・若年技術者の学会加入促進に向けた啓蒙活動・物探学会有志による無料セミナーの開催。
59. 学会の参加費用を下げてほしい
60. 講演会会場が遠方で殆ど参加出来ない

61. 参加費の当日払いが可能ないようにしてほしい
62. 啓蒙活動の強化
63. 会員数の増加が喫緊の課題と思いますが、例えば他学会との共催イベントを行うなどしてはいかがでしょうか？
64. 最近、特に感じるのが参加費が高騰していることです。昭和から平成の初期では確か4000円程度でした。運営の事もあるので難しいでしょうが、もう少し下げて欲しいのが本音です。
65. 参加費を下げてほしい
66. 他学会に比べて参加費が高額とは思わないものの、やはり若年層にとっては高額であり、そのため学術講演会に参加しない者もいるであろう。できれば交流会費も含め金額を下げてほしい。
67. 春については、地球惑星科学連合に統合した方が良い。
68. 物理探査結果の活用事例や適用効果をもっとアピールしてほしい。
69. 年1回の地方開催により、参加者にとっては地方出張の楽しみが得られ、運営側にとっては集約効果による投稿数の確保が図れるのではないかと思います。
70. 業務多忙なので、講演会は平日だとなかなか行きづらい。できれば土日を含めた方が行きやすい
71. 物探学会に新しい論文投稿あった段階で、mailで連絡があってもよいのではないかと
72. 公共事業の縮小や予算減の影響か学会の発表件数が減少してきています。対応策として、アンケートにも記入しましたが、他分野（土木学会、応用地質学会、地盤工学会など）と連携して、共同開催など考えてみてはいかがでしょうか。
73. 定款を変えれば総会の時期と講演会の時期を近づけることができる
74. 他の学会のように、春はJpGUに兼ねさせて、春の開催は必要ないように思う。
75. 講演会参加費（カード払い）を直前までできるようにしてほしい。
76. 春の講演会はJpGUと連続しており、秋だけ1回開催でもいいかむしれない。
77. 応用地質学会や石油技術協会などのように、一般会員が発表する形の学術講演会は1回（秋）、特別セッション中心の学術講演講演会を1回（春）としてはどうか？ 春はJpGU2019があり、ここで一般会員からの講演の受け皿となる。またこの形であれば、秋は東京、春は地方で実施してはどうか？
78. 学会としてのJpGU参加は縮小・撤退の方向が望ましい・6-9月に学会の学術講演会を開催。秋冬には小規模な研究発表会（扱いとしては学術講演会）を開催。いずれも都内（地方で開催するメリット < デメリット なのでは？）・1日券、全日程券を用意する・国際シンポジウムは縮小・廃止する（最低でも開催頻度を下げる。4年に1回程度）・2日目の特別講演は廃止し、総会関係行事も縮小する・費用対効果が不明すぎるアウトリーチイベント・講演は廃止する・石油技術協会、地盤工学会、などとの

連携・棲み分けをよく検討して、物理探査学会の講演会の来場者増を図る シンプルイズベストで、スリムな学術講演会を目指し、生まれた余力を来場者増加や活性化のための施策に回すのがベターかと思考します。

79. 九州内での開催を希望
80. 当方、研究開発側の人間ですが、参加いただけていない（学会は敷居が高いと考えている）企業の方に、気軽に参加あるいは事例研究などを発表いただける雰囲気を業界全体でつくり、講演会の活性化を図れば良いと感じます。それがケーススタディや物探ニュースへの機軸に繋がるのが理想です。研究開発側の人間だけの講演では限界があると思います。ただし、それが普通の講演スタイルなのか、それとも別な発表形式なのかは議論が必要だと思いますし、企業の側への（発表へのニーズ、発表のメリット）ヒアリングが必要と考えます。発表のニーズが無いのであれば、学会に来てもらえる研究開発サイドの講演イベントを考える必要があると考えます。
81. 春の学術講演会は JpGU の開催時期と近いため発表者の増加は望め長い物理探査学会固有の発表が 50 件程度はあるので、期間を 2 日間に短縮して（総会を含む）行うのが望ましい。秋の講演会は魅力ある地域を開催地とするのが望ましい。
82. 海外学会との協働促進
83. 学生やシニアへの参加費の減免（現状以上に）
84. ユーザーの参加を促す工夫
85. 春の講演会は JpGU との合同開催は叶いませんでしょうか。
86. 年会費に年齢傾斜をつけてほしい
87. 残念ながら石油系の発表・会員が減少している様に思う。講演会は年に 1 回、加えて国際シンポジウムが 2 年に 1 回程度が望ましいと感じる。
88. 学術講演会と国際シンポジウムが同時期に行われると、講演数・参加者ともに影響があると思われます。時期をずらすことをご検討ください。
89. 年会費が高いと思います
90. 交流会の参加費を、一般をさらに上げて、学生を下げると良いと思う。
91. 講演内容のストリーミング配信 ・講演会参加費の値下げ（会場規模の見直し等） ・講演会開催地の見直し（例えば、年 1 回 6 月開催で、隔年で東京と地方する。） ・年会費の値下（会誌やニュースレター等の全電子化によるコスト低減）
92. 学会誌やニュースなどは、紙ではなく電子ファイルのみで受け取りたい。
93. 講演会費および年会費を下げて欲しい
94. 講演会など有料化されているので、会社からの補助が出ない人は行きにくい。企業から協賛費を捻出していただき、無料化していただけると助かる。若手など自分の金を出してまで出て行かない。それでなくても学会など行かない傾向が強いのに。
95. SEGJ の今後の発展のため、率直なコメントを書かせていただきます。多く書くと分か

りにくくなると思いますので、3つだけ書かせていただきます。（1）春季大会は、地球惑星連合大会（JpGU）とほぼ同時の開催であり、参加するのが大変である。春季大会は、JpGUと共催しても良いかもしれない。（2）若手会員を増やす努力をすべきである。当研究室ではSEGJへの参加を促したものの、（SEGJよりも）JpGUへの参加を希望する学生が多い。例えば今年は、JpGUに5名参加したのに対して、SEGJには1名の参加であった。学生からは、SEGJでは若手間で議論できない等の意見があった。当方は今後もSEGJへの参加を促すが、SEGJ側も、そのような環境作りへの努力をお願いできれば有り難い。（例えばSEGJ講演会と同時にDISCを開催していただければ、学生参加者は増えるかもしれない）（3）学術誌のレベル向上のためにも、海外を含めた著名研究者からの招待論文を増やしても良いかもしれない。クオリティが高く、多く引用されるような論文を増やす努力が必要かと思う。また学術誌だけでなく、講演会についてもクオリティを向上させるための努力（例えば各セッション毎に招待講演1名を設置するなど）が必要と感じる。

96. 若手技術者・初心者対象の実技講習（生データを使って実際に解析してもらう）
97. 会員の絶対数が少なく、発表することにメリットがない。物探学会で発表することは成果を閉じ込めてしまう。つまり、物探学会の講演会で発表するよりも、他の学会で発表することを選んでしまう。・JpGU大会には参加しないということであれば、会員が増えることはない。春はJpGUと重なり、地震・防災系は来ない。・弱小学会が如何に魅力あるものであるか。・小学会だからできることもあるとは思いますが、学会員の利益なのか、社会の利益なのか。社会の利益を目指しても担当する数人の負荷が高くなるだけだろうと思う。誰もボランティアは見向きもしない。私自身以前国際シンポ委員をやっていたが、その後は参加できない。運営時の様々なノウハウは個人にしか残らない。委員だった際には他社の知人も増え、その後の業務等でもそれなりのメリットはある。・今の会員に意見を聞いても、学会員の利益優先を選ぶしそうなれば、会費・参加費を下げ、面倒は棚上げにして、学会は更に縮小することを選択するのではないか。・しがらみが多く、脱会したいができないという状況の会員が多いのではないだろうか。
98. 参加費を下げたい
99. 学会講演数の減少については、資源探査分野へのプロモーションや他学会との共催セッションの企画等の方策を検討する必要があります。また、講演数が減少するのであれば、逆手にとって、議論（質疑応答）の時間を増やす試みも検討してはどうでしょうか。
100. 物理探査技術を応用したさまざまな技術の重要性を紹介し、物理探査技術を身近に感じてもらえるようなアウトリーチ活動
101. 今後その分野で期待できる発表があった場合、さらに詳細に研究会等を立ち上げてそ

の技術の追及に心がけてはどうでしょうか？

- 102.各種行事参加費の値下げ
- 103.積極的に参加できない年の会費については、SEG の様に徴収せずにアカウントを休止状態にしてほしい。
- 104.若手の研究者に対して参加費を減額すべきだと考える。・他にも、物理探査ニュースなどに投稿する義務を追加して特定分野の学会の報告内容をまとめさせて、その分の旅費等を補助する、などの制度を新設すると良いと考えます。以上、よろしく申し上げます。
- 105.アンケートの設問が一般的で、どのような意見や情報を得たいのかがあまり見えてこないように感じました。
- 106.もし、講演予稿提出後に発表内容の主な論点・考察に大きな変更があった場合は、講演会後に公開される講演論文にその変更内容を反映させることは可能でしょうか。
- 107.新しい知見の紹介、新しい測定機械の紹介や活用方法の紹介の行事の開催。
- 108.参加費を下げて欲しいが、難しいと思う。
- 109.学術講演会の proceedings の中で expanded abstract が英語で書いて頂きたいです。
- 110.勤務地（仙台）でのイベントを開催して欲しい。
- 111.海外の学会や研究機関との積極的な交流 国内他学会との交流
- 112.探査深度別・物理計測に関する研究会や講演会のセッション
- 113.物理探査の結果得られる情報によって、世の中をどう変わっていくか、一般市民の目線での社会貢献度をどう示していくかという活動に期待する。
- 114.小委員会を増やして、活動の活発化を図ること
- 115.若手技術者がノビノビと発表できる環境がほしい。地盤工学会で言えばジオ関東みたいなもの
- 116.現在のような活発な講演会や講習会の活動を、引き続き行っていただきたく、お願い申し上げます。
- 117.セミナー等に参加する場合、だいたい東京周辺であり、交通費と参加費の負担があるため、開催地を東京付近以外にも増やすか、参加費をもう少し下げていただけると参加しやすいかと思えます。
- 118.参加費を下げてほしい
- 119.学会に入っていることをメリットに感じてもらうため、一般講演のセッション以外に、参加のハードルが低いセッションを設けても良いのではないかと。
- 120.他学会との連携（シンポジウムやセミナーの共同開催）
- 121.ジェンダー、年齢の偏りを少しずつ改善することを意識することが重要かと思えます。
- 122.物理探査や研究で必要なセンサの現状やニーズを開示していただくことや、その分野の研究開発動向を時々発表していただけると良いと思えます。



123. 学術講演会の発表内容が専門的になりすぎている。 中堅・若手社員が参加しにくい。  
また、実務に反映しにくい。
124. 講演者・運営側の立場では、今後さらなる減少が見込まれる学会員数で今と同じ規模の学術講演会(国際シンポジウムも含む)及び関連イベントを維持すること自体がどう考えても無謀に感じる。国際シンポジウム開催の年は学術講演会を1回にする等の工夫が必要。 一方、非講演者(参加のみ)としての立場では、学術講演会を年に2度も聴けるのは勉強になるとともに、業界のコネクション形成・情報収集の機会が多ければ多いほどありがたいと感じるのも事実。 このような講演者・運営側－非講演者間の学術講演会に対する考え方の溝は、今後も埋まらないような気がする。 また、仮に年1回の学術講演会にしたとして、フィールドワークの兼ね合いで参加できなくなるリスクはある。梅雨時や、年度末など、フィールド調査がやりにくい時期に開催するのもありではないか。

以上